

施設の設置は非常な負担を企業に及ぼし、府の施設である公共陶工職業訓練所の入所希望者でさえ、ここ、二、三年は激減している状況である。この労働力の不足は、賃金上昇問題と共に、京焼の消長に及ぼす影響の大きいことを考え、早急に、対策を考えるべき重要課題であると思う。

5 健康管理

京焼が、東山山麓を製産の中心としてきたのは、登り窯のためであり、又比較的人口密度の低い地域を選んで、その窯煙の被害を成るべく少くしてきたためであろう。

日本でも有数の湿度の高い京都で、しかも、山麓をその主産地としてきたことは、一層湿気の多い区域を選択したこととなり、古くから、有名陶工、将来有望な陶工、指導者が比較的短命でその生涯を終り、京焼発展の一障害、損失となつたことはいなめない。

明治以降市街地の発展と、人口の増加、陶磁器需要増加に伴う生産施設の拡充は、益々その工場施設を狭隘且つ不健康な状態（日射、湿度を主体とした）に追いやり、前述の悲劇は繰返えされてきたのである。

業界の疾病の主なるものは、呼吸器疾患、消化器疾患であり、他産業に比較的多い循環器疾患は割合少ない。近年他産業では低減の傾向を示している呼吸器疾患の減少を見ないのは、一はその環境にあり、二は、近年急に問題として採り上げられた珪肺の発生にある。珪石の粉塵を吸入する結果発生する珪肺は、古くより存在したのであるが「よろけ」「後家づくり」等と称して結核の併発による「肺病」として比較的等閑に附されていたのであるが、昭和二十六年労働基準局の調査では京焼業界の発生率一四、八%（従業員三十人以上の事業場対照）、同三十五年には三三%と検診されている状況を見ても、あらためてその被害の大きいのに驚かざるを得ない。しかも近代の医学をしても未だその治療法は発見せられず、進行を防止し、結核の併発を阻止することが漸やくという状況であるので、一度罹患せんか、悲惨な環境におちいるという誠に厄介な職業病といわなければならない。

将来、京焼業界も、近代設備への移行、工場施設地の転換、経営の合理化は必然のことと推察されるが、従来、忘れられていたこれらの衛生、健康管理にも抜本的対策と、新しい病害予防法を併せ行うことは（珪肺の治療法の日も早い発見と共に）業界の進歩、発展に欠くことのできない事項と思う。

第五篇 京焼の人々……（故人小伝）

凡 例

- 一、本篇は京焼に関係があり本書で取扱つた年代の人で既に故人となつた人の略伝を収録した。
- 一、本書の性質上個人の記事を書せる事は重要なので出来るだけ詳細に調査する方針で進んだ。
- 一、然し一部を除いては記録の残るもの少なく、又口傳に伝わるものもまち／＼で取捨撰択も容易ではなかつた。
- 一、従つて繁簡其規を一にすることが出来ず、人により詳細に、人により簡略に終つたことは、残念ではあるがやむを得ない結果となつた。
- 一、ことに本文の記事中に関係ある人々は、漏れなくその本文に記したので、この篇ではただこういう人があつたとの記録にとどめた。従つて業界に活躍した人物は其本文について読まれたい。
- 一、なお、「京焼百年の歩み」よりも古くこの書の範疇に入らない人でも京焼に関係ある人物は一応簡単に記録した。例えば楽焼の初代から数代、仁清、乾山等の人々のそれである。それは京焼を知る為に忘れられぬ人々を想起する一つの思い出としての念願からである。
- 一、順序は大体年代順にならべた。

楽 家

元祖、宗慶 朝鮮よりの帰化人、阿米夜は宗慶と号して、時の將軍、足利義植の知遇を得て、上長者町西洞院に居住し、鴨川、山科の土石をもつて釉薬を作り、これを、手捻で指頭、「ヘラ」等を使つて造つた「すえもの」にかけて焼いた。従来京都では施釉したものが珍しかったので、將軍の愛用するところとなり、その用命を受けたのがはじまりといわれている。天正二年（一五七四）八十二才で歿す。

宗慶の妻は、夫の没後、尼となり、夫より伝えられた製陶法により作つたものを尼焼とよばれている。

初代 長次郎〔法名長祐、永正十二年—文禄元年（一五一六—一五九二）〕

宗慶の子で、はじめ佐々木氏（母方姓）を称していたが、利久の姓を受けて田中とした。信長、秀吉の殊遇を受けて天正十三年（一五八五）、聚楽第造営の時、第内に居を貰い、秀吉の用品のみを製作していた。その作品はまだ楽焼とはいわず、聚楽焼解けくすり茶盃と呼ばれていた。作品には茶盃、香炉、香盒等茶道に使われるものが多かつたが、中には天正二年作の獅子の棟瓦や、ぼたん獅子起上りの大平皿等もある。

註 初代造の獅子の棟瓦は聚楽第に上がつていたものとはいえない。二条城の北側—現NHK京都放送局辺—より出土したもので、恐らく伏見桃山の城にあったものを遺構として二条辺に移った建造物について来たものらしい。刻銘のあるものでは、最古のものとしてされている。

茶盃では利休七種（大黒・鉢間・東陽坊・早船・松材・木守・臨濟）重要文化財の禿等がある。

二代 常 慶〔天文五年—寛永十二年（一五三六—一六三五）〕

通称与次、後、吉左衛門という。町住を許され現住所に移り、楽焼茶碗屋の、のれん（光悦筆）を掛けた。秀吉より天下一茶碗屋の号と、楽の金印をもらつたといわれる。

本阿弥光悦は常慶に陶芸を習つた。

三代 道 入〔天正二年—明暦二年（一五七四—一六五六）〕

通称吉兵衛後、吉左衛門と改めた。有名な「のんこう」はこの人である。

楽家中の妙手といわれ元伯、光悦の知遇を得た、特に黒、赤楽に逸品があり、次の「のんこう」七種はその代表作品である。

獅子、升（四方形）、千鳥（三角形）、稲妻（朱釉）鳳林、若山、鶴。

四代 一入〔寛永七年—元禄元年（一六三〇—一六八七）〕

幼名、佐兵衛、後、吉左衛門、朱葉は累代中最も味わいがある。藤村庸軒と親交があつた。

五代 宗入〔寛文三年—享保元年（一六六三—一七一六）〕

幼名、吉兵衛後吉左衛門と称し雁金屋三右衛門の子で二才の時茶家の養子となつた。黒茶盃は光沢が少なく「かせ葉」と呼ばれ、茶人の推奨品で、又、交跡風の色彩の美しい向付がある。

六代 左入〔貞享元年—元文四年（一六八四—一七三九）〕

惣吉と呼び、後、吉左衛門、大和屋嘉兵衛の二男、写し物が堪能で、長次郎七種や、光悦等の写し物がある。四十九才の時、赤黒二百の茶盃を造る。（左入二百之内茶盃）

七代 長入〔正徳三年—明和七年（一七一三—一七七〇）〕

左入の長男、幼名惣吉、後、吉左衛門と改める。細工物に優れ、目連上人像は有名である。

八代 得入〔寛保四年—安永三年（一七四四—一七七四）〕

長入の長男（又は次男）幼名惣吉、後、吉左衛門、四代一入の幼名佐兵衛をも名乗る。得入の号は寛政十年（一七九八）その二十五回忌に送られた。三十才で死去したので、作品は少なく珍重されている。

九代 了入〔宝暦五年—天保五年（一七五五—一八三四）〕

七代長入の次男（得入の弟）で幼名惣治郎、後、吉左衛門、喜全とも称す。十五才で家督相続、七十九才迄六十四年間家業にはげんだ。生涯を三期に分け、前印時代（十五才—三十三才）「火前印」「焼前印」と云い、焼失した印をいう。第二期中印時代（三十四才—五十六才）第三期、草葉時代（五十六才—七十九才）とあり、石山に隠居後の作品は氣品に富み且つ深味のある作品がある。

十代 旦入〔寛政六年—安政元年（一七九四—一八五四）〕

了入の次男で、十七才で了入長男惣吉早世の跡をうけて十代をつぐ。和歌山の紀州公の御庭焼を指導、又初めて角印を造つた。

十一代 慶入〔文化十四年—明治三十五年（一八一七—一九〇三）〕

丹波国、国分小川家より十一才で養子となる。幼名惣吉、後吉左衛門、諱を喜貫、その印は前印、嘉永七年（一八五四）迄中印、晩年には白葉印を使用、角印は十一代喜貫とあり。その作品は「のんこう」に次ぐ名品といわれている。

十二代 弘入〔安政四年—昭和七年（一八五六—一九三二）〕

慶入の長男、幼名小三郎、後、惣治郎、相続後、吉左衛門、諱を喜長と称す。黒幕葉、蛇蝸葉、特に二重幕葉は独特のものである。

十三代 慥入〔明治二十年—昭和十九年（一八八七—一九四四）〕

弘入の長男、幼名を惣吉、後、吉左衛門、諱を喜英、三十三才で家督相続、漢学、習字、絵画、鼓及びフランス語等をも習得した。冊紙「せせらぎ」を毎月刊行して茶道にも貢献した。

現代は、十四代がついでいる。

脇窯

楽焼本家より分派した系統の楽焼を脇窯と称し其の他の系統のものは脇窯といわない。脇窯の主なものとは次の通りである。

「宗味焼」「道楽焼」（三代道入の弟）「玉水焼」玉水葉ともいわれ、四代一入の弟一元が母の郷里であつた木津、玉水で築窯した。四代目を

玉水甚兵衛といい、楽翁と号し、はじめて玉水印を用いた。

〔余 録 15〕

楽家を訪ねて

現代楽家は十四代目で当主は東京美術学校図案科の出身、中々の新人であるが伝統を誇る旧楽家は現代の空気を吸い込む事は時間がかかり、昔からの茶道の宗家と連絡をとつて茶碗等の茶道用器を作っている。

「黒楽は」との問に対して、

加茂川石を細磨して釉薬として使う。黒楽を焼く窯は径六寸位の内窯を有する炭窯で其内窯の底から周囲全部に三寸位の間隔をもつ外窯との間に堅炭を一杯に詰め込み、内窯内には一個の茶碗を入れて焼くのである。火度を上昇せしめるために下部から「フイゴ」で風を送り、上からは

大団扇を使つて火をおさえて窯内の火度を強めるのだという。焼き上つたものは鉄のはさみでつまみ出し、耐火粘土性の板の上に置き、匣鉢を上から蓋いかぶせて徐々に冷却させるのである。よく黒染は焼けたものをつまみ出して冷水の中に漬けて黒色の発色をよくするという人があるが染家ではそんなことはせず除冷するのであるという。この方法は初代から変りがないと語つた。

坏土は大亀谷の赤土、岡崎附近(天王寺町)の青黒土を使う。赤染は坏土の上に黄土を塗り、透明釉を掛けるといふ。窯道具の土は素地土に伊賀の木節を混合して使うのである。

赤染窯は所謂錦窯と称する内窯の径二尺五寸位のもので、松薪を焚いて焼成する事は錦窯のとおりで、内窯の内に作品を積みかさね、焼き終れば取出して除冷するのである。

坏土は新しい土に古い土(削り土などの)を混ぜよく煉つて手作りである。一切陶車を使用せず、厚サ一寸位の鉄鉢形を作り、室(ムロ)に囲つて乾きを防ぎ、適當の固さになつたとき、鉄のかみそり様の道具を使つて形を削り出し製形するのである。かくて出来た茶碗は乾燥後素焼窯に入れて素焼をする。素焼は黒い炭素の斑点などの残らないように相当強く焼く。

窯場は神聖な所として昔から女人の出入を禁じ男子も靴等の獣皮を使うものを禁止してをり、古くは皮ベルトの如きも使用禁止されたといふ。誠に古風な家柄であり時代離れがしている。

裏千家四代の時加賀の前田侯が京の陶器師を連れて金沢に帰られ、染家から飴釉染の方法を伝授した。それ以来染家では飴釉を使わないといふ。加賀の大樋焼はこの飴釉を使つて今日に至つていのである。

以上のような伝統の家風を守つて使用人も家族以外は、四代に亘つて忠勤を励む老翁一人だけであり、窯焚のような人手を要する時は親類から二、三人手伝に来てもらつて処理するという。このようなやり方は果して何時まで続き得るものか、京には珍しいものの一つである。染家の入口の「ちやわんや」という光悦が書いた「のれん」の形、字体がそのまま残っているのもなつかしい眺めの一つである。(昭和三十四年訪問)

〔余録 16〕

染茶わん

京の古陶名工と言えば仁清、乾山、木米と指を屈するが、それと平行して染家を忘れてはなるまい。染家と云えば染焼の名家、染焼といえ

先づ染茶碗という印象を与えるほど染茶碗は其代表的なものである。茶道を知らざる者染茶碗を語るべからず、などという人もあるが必ずしもお茶を知らずとも染茶碗の良さを知つてもよいではないか。さて従来識者の茶碗を見る見方としては次のようなことが述べられている。

染茶碗には五ヶ所の見所がある。其一つは茶碗の口であつて、これを口作りと称え、茶碗の口の所の形及び模様または出来工合の良否を識別するのである。口作りには五岳と称する五つの高い処がある。其五岳の中で最も茶を飲むに適した飲み心地の好さそうなるところを選んで其谷にあたるところからお茶を飲むわけである。又五岳を作ることの一つの理由は、茶杓を茶碗の上に載せて持つて出る時茶杓の落ちない様に口の周囲に五つの凸凹を拵えるのである。この口作りは染茶碗の製作上最も難かしい一つの急所であつて、余り五岳がはつきりし過ぎると態とらしく見えて面白くなく、目立ち過ぎてもよくない。それかと云つて余り平凡であつても変化に乏しく喜ばれない。口作りのむつかしいところである。口作りには其形状によつて色々の名称がつけられている。例えば蛤蘭と云うのは蛤の目の様に一番上が薄く尖つてゐるのを指し、中けずりと云うのは幾らか中へ引込んでゐる内側の肉を落した口作りであり、外けずりというのは外の土を篋で落した口の作り方、外ひねりと云うのは口をずつと外側へそらせたもので光悦の茶碗などによくある作り方である。このほか口作りには多種多様の作り方、名称が附けられている。第二の見所が茶溜りである。茶を飲んで仕舞つた後でお茶の少し残つて溜る処をいうので大抵の染茶碗には茶溜りと云うのが殊更に出来ている。低の中に少し凹んだ所があるのがそれで、この茶溜りにも色々の形状がある。例えば、単にまん丸く凹みを残したもの、それでは平凡で規則正しくなり過ぎて面白くないと、一方だけ凹ませてあとはゆつくりなぞへにしたものとか、茶溜りの形を巴のようにして手工の冴えを顯したものと色々工夫をこらされる訳である。第三の見所は高台作りである。この高台の作り方にも色々あつて中々難しいこととがいわれている。高台の中に巴形をつけるが、一つの巴或は二つ巴のものもあり、又高台へ食込みを拵えるという作り方もある。尚、高台の外のところへすつと抉りを入れたり、又高台も丸く一様の厚さでは面白くないと狭い所を作つたり、高低をつけたりして変化を感じしめる。又高台の中に染の印を捺したものの中印と称している。第四の見所は茶碗の脇取といつて、茶碗の脇を篋或は他のもので土を削り取る。これが一種の模様というか、高低、凸凹を見せて何となく親しみを感じしめるのである。同時に茶碗を手にとつた時の持ち工合の気持の好いようにと心がけるのである。第五の見所が茶碗の中の茶釜摺と称する個所である。茶碗に茶を入れて、湯を注いで茶釜で廻す時に、茶釜の当る所で、茶碗の内側の中頃の処に少し突起した所がある。其処に曲線の模様を取つて茶碗に趣をつけるのである。この五つがお茶碗の見所急所と

されてやかましくいわれている。

吾々門前の小僧には一向面白くもないように思われるがお茶人の楽茶碗鑑賞の規準とする処であるというので書いて見た。必しもこれによらないとしても一応の見所として決めておくのもよいと思う。そして其茶碗の鈎合調和落付きなどを見るべきであろう。

楽焼は陶器の中でも極めて弱火度の焼物で土器と陶器との中間位のものだが釉があるから陶器の部にはいる焼物で高級品とはいえないが、手捻りの芸術味豊かなものとして身近に興味を感じる東洋趣味の嗜好としては見逃す事の出来ない高級なものともいえる。豊公時代に始まり千利久の親しい指導によつてお茶との關係を深めて行き、今日迄連綿と続いている楽焼は誠に珍らしい存在であつて、今の楽氏は十四代目である。代々其業を守り伝統の光を断たない事も稀な事である。一井戸、二楽、三唐津といつて、遠州流の人はお茶碗は井戸が一番といい、或は一萩、二楽、三唐津といつて、萩を第一とする説もあるが、お茶碗は何と言つても楽に優るものはないと思う。

楽茶碗は黒楽と赤楽の二種が代表的である。初代長次郎、二代常慶、三代「のんこう」(道入)の三人が有名であり、ことに三代「のんこう」は楽家累代中第一の名工と云われ、残された名品も多いとされている。初代長次郎は最初は大坂城内でお茶碗を焼き、城内の土を使つたとの事である。長次郎七種と称する有名な茶碗が残つており利久の愛したものだといふ。常慶には残つてゐる茶碗は非常に少ない。常慶は香爐釉を發明したと伝えられている。白茶けた一種の白釉である。これは香爐にこの釉をかけて焼いているからであらう。常慶の時聚楽の城から市井に出て太閤の手を離れたようで、為に大阪落城の難にも会はず、京洛の地に安住していられたといふ。

この時代に有名な本阿弥光悦(大虚庵)がおつて、常慶と非常に仲がよく、楽焼を習つて名品を残している。尤も、光悦は三代道入とも親しく、土を取りよせて自作したものを道入の窯に持たせて釉掛をして焼いてもらつた記録が残つてゐる。楽家の入口に掛つた暖簾の文字は光悦が書いて常慶に与えたものといわれ、のち、京の大火で焼失したが形や文字は残されて今も入口にかかつてゐるのである。

さて、三代道入は無類の名工で光悦も師事し、彼の芸術を賞賛しているのを見ても凡人でなかつた事がわかる。道入の作品は一言にして云えば極めて豪放大胆、而も技工秀抜というに尽きる。極めて薄作りのものが多いといふ。この道入は昔から「のんこう」の異名で通つてゐる。さてこの「のんこう」とは何のことであらうか。定説がない。茶人千宗旦が道入を愛し或時一本の竹を二つに切つて一つを「のんこう」と名づけ、道入に贈つた。これが道入の氣に入つて常に花を活けて楽しんだ。それで宗旦が道入の処へ行くのを「のんこう」の処へ行くと言つて訪れたと

いう処から、人、道入を「のんこう」と呼んだのだという説がある。又一説には無心に作つた茶碗を宗旦が非常に佳い出来だと賞めたので、無我の境地で作つた即ち乃無己(のむこ)だといふのである。或は良い工人即ち能工が「のんこう」になつたのであるといふ人もある。また、近頃或る人は朝鮮に「のんこう」鍋という石の鍋がある。石でつくつた平たい鍋で、道入時代それに似た形の鍋を楽焼で焼いたので「のんこう」と名がついたといふのである。いづれにしてもこの「のんこう」の意味は、はつきりしないのであるが、楽焼碗といえは先づ「のんこう」かといふほど其名は通つてゐる。「のんこう」にも長次郎七種に倣つて「のんこう」七種といふのがあるが、九代了入の時千家で選んだもので、了入が写しを作つたといふ。この九代了入も亦名工で「のんこう」の再生だといはれた人である。

雲林院宝山

天文年間初代雲林院うじんいん要藏は、洛北に住み、加茂神社の茶器等を製作、七代文蔵に至り、栗田、東分木町に移り栗田焼を始め、九代安兵衛の代に奈良宝山寺より宝山の号を受けた。十七代宝山昌平は家業を縮少し三条東町の窯をとじ、泉涌寺東林寺に住し茶器類を製作している。

本阿弥家

本阿弥光悦(永禄元年—寛永十四年(一五五八—一六三七)七十九才)

父の代より刀剣業(研磨)であつて、加賀の前田家に仕え、元和三年(一六一八)徳川家より鷹ヶ峯に地所を受けたので、太虚庵と号し、そこに住んだ。書道、絵画、蒔絵等に長じ、茶を織部に学び、また陶器は楽家のものを好み、常慶及び道入(のんこう)と親しく、赤楽を主として、茶碗、まれに香盒等をつくつてゐる。尚明治三十一年六月には、京都の全国漆器共進会で、農商務大臣より、描金技術向上の功勞により追賞されている。

本阿弥光甫(慶長六年—天和二年(一六〇一—一六八二)八十一才)

光悦の孫で、光悦に愛され、十五才のとき、鷹ヶ峯の光悦町に移り、刀剣業に従事する傍、茶を好み、絵画にもすぐれ、製陶にもたくみで、空中齋と号した。

野々村仁清(天正六年(一五七八)又は、慶長元年(一五九六)又は、元和元年(一六一五)—寛文六年(一六六六)万治元年(一六五八)

野々村清兵衛といい、丹波北桑田郡野々村（若狭との境）の出身といわれる。仁和寺宮に仕え、名を清左衛門と改め、又、宮から仁の一字を受けて、仁清と号した。

仁清は仁和寺の寛深法親王、性承法親王の知遇と、中宮の東福門院（二代將軍、徳川秀忠の女）を通じて、貴族階級の支援と愛顧を受けめぐまれた環境の中に洗鍊された手腕を発揮し、ロクロの妙手といわれ、茶器、水指、皿、鉢、花瓶等に逸品を残しているが、その特色は、瀬戸、信楽の手法を受けて、中国の文様をとりいれ、日本的な京焼陶器を完成していることである。

仁清の手法はその死後、尾形乾山等に伝えられ、文化文政以後の仁阿弥道八、永楽保全などに強い影響を与え、又、仁清風として、明石焼（兵庫）高松焼（香川）赤膚焼（奈良）虫明焼（岡山）淡路焼（兵庫）等に伝えられている。

尚二代三代と仁清を号した陶工がつづいたと見られる。現在御室仁和寺門前にその窯跡がある。

〔余録 17〕

藤の壺

仁清（にんせい）の代表作の一つに藤の壺がある。丸亀の京極家に伝わったもので、今は長尾美術館にあるかと思うが、其壺の形のよさ、何とも言えぬロクロの味が顕れて整った形、それに釉のうま味は又格別、古今独歩のロクロの名士とうたわれるのも宜なるかなと感嘆させられる。それにも優して色絵の藤の花の絢爛眼を奪うような美しさ、もしもあの壺を親しく手に抱く事が出来たならば、あの藤の花の美しい色、優しい花や葉をほゞづりして見る事が出来たなら、などと古い記憶をたどつてなつかしく思う。我等は博物館の陳列棚に硝子越しで眺めるに止まるのが物足りない。温か味のある気持、曲線のいかにも滑らかな造型美の極致ともいふべき形体、まことに日本一のロクロ師であつて、他の追従を許さぬものがある。仁清信楽の壺とか仁清の良いものは数多くあるが、日本陶器の代表としてもこの藤の壺は恥しくないものであろう。仁清が丸亀の京極家へ五ヶ年抱へられて城内でお庭焼を焼いたというが、京極家の話では、時の家臣が慶長小判を小刀で削つて、仁清の陶器の上絵付の金粉の材料にしたとの伝説もあつて、それを裏づけるものに、いま京極家に残つた仁清の作品に金が厚くかかつた物が多いこと、その金の厚さが並はづれていること、維新当時家臣の悪い者が仁清陶器の金を削つて地金として売つたとさえいわれるとの事である。見事な金模様の出来た

のも無理からぬ事で、丸亀の京極家の釘かくしの陶器の如き其一例であらう。

仁清の人となりは恐らく謹厳で真面目な人であつたらう。ロクロの巧みなこと、豪放味の見へないこと、細心の注意が払われていること、などから、又自分の印を捺すにも大体高台の左り下に押すなど其場所にも注意を払つてあるなど、如何にも謹直な人であつたように窺はれる。仁清の経歴等に就てはつきりせないのは残念であるが、陶工の画師と異つて世間に優遇されなかつた一つの現われでもあらうか。

二世三世の仁清もあるようだし、偽物もまた沢山あるので、仁清もなかなかややこしい。先年西ノ宮の白鶴美術館に見事な孔雀が籠に入つた大きな置物が仁清作として飾られてあつた。其細工の繊細巧緻目を驚かすものがあつた。恐らく代表作の一つであらう。

安田家

鍵屋といい、初代源左衛門が天正年間（一五七三—一九一）清閑寺村で製陶したのが始まりで、六代源太郎が、栗田中之町に移転、八代源七以後今道町に移り、十三代源七久楽は名工として名高い。十四代源七は明治年間、外国向け製品を作っている。十五代源三郎は明治二十年六月、資本金十萬円で、京都陶器合資会社を作り、欧米、南阿、南米方面の陶磁器輸出貿易を営んだ。

茶碗屋久兵衛

寛永年間（一六二四—一六四三）三条河原町に住居し、陶器を業とした。当時肥前有田の青山幸右衛門から、肥前の上絵、金襴手の法を伝習してきて、仁清に謀つて研究、試作し、はじめて彩画の法を得た。幸、後右衛門は秘法を他国に伝えたかどにより重刑に処せられ、久兵衛はこれを聞き心痛のあまり発狂したと伝えられている。

音羽屋九郎右衛門

元和、寛永（一六一五—一六四三）の頃、清閑寺村、丸山に、行基の遺跡といわれる窯跡を発見し、ここに開業して陶器をつくつた。

音羽屋惣左衛門

寛永十八年（一六四一）清閑寺村、丸山で焼物を渡世としたといわれ、恐らく、九郎右衛門の後継と思われる。その後九代まで続いた。九郎右衛門、惣左衛門が、五條、清水の窯の元祖といわれている。

三文字屋九右衛門（又は九左衛門）

寛永元年（一六二四）瀬戸から栗田口三条今道町に来て窯を築いた（一説に窯は三条栗田口華頂畑―現栗田小学校の南側）。専ら茶器を製作し、その製品は世評によると「さつま」の模倣であるといわれ、土は岡崎の土（現、岡崎天王町附近の土で、築家もこの土を使っている。）で稍土質荒く、さくい性質を有するので、瀬戸の焼成品のようなものを目標としたのが、さつま風に焼上つたものであろう。これが栗田焼の始祖といわれ、後世そのあとを、九右衛門の辻とよばれていた。

九右衛門はその後江戸に赴いて、幕府の陶器師になり、その子の庄右衛門、助右衛門は栗田にあつて陶業に従事した。これらの製品には栗田の印を押している。

錦光山宗兵衛

錦光山宗兵衛の初代は小林徳右衛門、家号を鍵屋といい、正保二年（一六四五）三条栗田口に開窯した。元禄六年（一六九三）二代徳右衛門、延享年中に三代喜兵衛（又は茂兵衛）がその跡をついだ。延享二年（一七四五）には、かねて幕府御用茶盃師であつた三文字屋九右衛門の子孫にかつて、三代喜兵衛と岩倉山吉兵衛の二人が調進することとなつた。三代喜兵衛は又栗田青蓮院の宮より錦光山の名を受けたといわれている。四代、五代共に喜兵衛と称し、御用陶工で、オランダ写し、御室写しを作つた。



錦光山宗兵衛（七代）

六代宗兵衛（明治十七年（一八八四）歿）は、青木木米に師事して磁器の製法を習い、明治五年には帯山与兵衛とはかり、輸出品の試作をした。これを神戸の外国商館で試売したが好評であり、京都陶器の海外に販路を求めた最初であるといわれる。これより花瓶、水指、香炉等続々と海外に出るようになった。

七代宗兵衛（明治三年―昭和二年（一八六七―一九二七））六代とともに、明治十五、六年の不況をも突破して益々貿易に励み、欧米を視察して製品を改良、又松風嘉定等と協力して、市立陶磁器試験場、陶磁器伝習所の設立等に尽力し、緑綬褒章を受

けた。その工場は東山区、三条栗田口、夷町、袖ノ木町に亘り盛大を極めた。錦光山工場は錦光山竹三郎、宮永東山、重富英、等が活躍し経営方面には錦光山栄太郎が、貿易方面には森某が腕を振つた。七代は昭和三年六十一才で歿。

八代は誠一郎といつたが、栗田焼は輸出及び内需面においても逐次衰微し、昭和五、六年頃には殆んど其工場の機能も停止し、工場の有能者も、清水、五条、泉涌寺方面に移り、又は転業するなどして、現在では全くその影を没した。

尾形 乾山（寛文三年―寛保三年（一六六三―一七四三））

乾山は京都の呉服商雁金屋・尾形宗謙の子で、尾形光琳の弟である。名を惟元といい、通称を権平、号を深省、尚古、陶隱、紫翠、玉堂、靈海、逃禪、習静堂等と称す。

学問及茶事を藤村庸軒に学び、画を狩野安信に習つた。陶窯を洛西鳴滝村に築き製陶した。〔元禄十二年（一七〇〇）三十七才〕乾山の号は、鳴滝が皇居の乾方にあたることによつてゐる。正徳二年（一七一一）乾山五十才の頃から、鳴滝より栗田口や五条坂附近に移り製陶した。

公寛親王の厚遇を受け、その招きにより、晩年は江戸で製陶し、又武州佐野に趣き佐野乾山を焼いた、寛保三年六月八十一才で、江戸に歿した。入谷の薬玉山善養寺に葬る。

乾山の作陶は仁清と、京焼最古の押小路焼（内焼窯、楽焼）の伝統の上に、光悦の陶法をとりいれ、乾山独特の作風をきずいた。

〔余 録 18〕

鳴 滝 窯

仁清（にんせい）が仁和寺門前に窯の煙をあげている晩年に近い元禄十二年（一六九九）頃、其仁和寺の北の方、鳴滝村の山麓に窯が新しく出来て煙を揚げ出したのが乾山（けんざん）の鳴滝窯であつた。時に乾山三十七才というから中年からの製陶である。

乾山は尾形家の三男坊で次兄光琳（絵師）と共に幼少から画道、文学等富裕な家庭の教養を受け、禅学にも親しみ、内省的な生活をして独身で通つたようである。近頃の研究によれば、乾山陶器釉法伝書など色々の陶器秘法伝書が発見された。それによると仁清から口伝授の数々を受けており、又仁清の二男等を自分の窯に仕事をさせてゐるなど仁清との関係は非常に深いものがあるようで、陶器作りに対する造詣の深かつた事を物語つており、絵画の上から意匠等にも乾山独特の陶器が生れて仁清陶器とは趣の異つたもののあるのは見逃がなせない。要するに乾山

は意匠の点とか脱俗した素朴閑雅な気品の点に至つては古今独歩の陶工である。

当時世間では金の光琳、銀の乾山と噂されたというが、光琳の華麗豪華な絵画と、静寂そのものの乾山とを比較した面白い顛し方であるが、これは絵と陶器に顕れた面だけでなく二人の兄弟の性質をも顕した表現でもあらうと思われる。乾山は深省と号し鳴滝に窯を築くまで近くの双ヶ丘に習静堂を建てて住つた事など昔兼好法師が徒然草をもした双ヶ丘をも思い出されてなつかしい限りである。

兄、光琳と合作の角血など見事なもので、中には大日本陶者雍州乾山陶隠深省製の銘款を残して、天晴れ陶器の王者の貫録を示したものもあり、斬新にして尚古的な独自の陶芸道を打立てたのである。

乾山は鳴滝窯の時代から寛永寺の宮に従つて江戸に居を移し、入谷に製陶し、又上州佐野でも佐野乾山として製陶したと伝えられるが、作品の残されたものが誠に少なく、乾山と称するもの、多くは偽ものなりと見る向もある。

名工乾山八十一才で江戸で歿した。晩年は恵まれずに終り、入谷の善養寺に（現在栗鴨に移る）に葬つた。乾山は江戸を好まず、芸術的な郷土心は常に京洛にあつたことである。

最近（昭和卅七年二月）新聞紙の報づる処では二三年前から有志の佐野近郊の旧家訪問より佐野乾山の逸品二百余点を発見、又乾山が佐野で記した二三の有力な記録が顕われて、識者の注目を浴び、真偽両論、互に相譲らずという事である。やがて何等かの結論が得られるであろう。

帶山与兵衛

帶山与兵衛の初代、高橋藤九郎は近江の人で延宝年中（一六七三—一六八〇）京都栗田東町で陶業を始め、帶山と称した。

二代与兵衛は享保年中（一七一六—一七三五）抹茶器をつくり、

三代与兵衛は宝暦二年（一七五二）業を継ぎ、酒、茶器をつくつた。

四代与兵衛は天明年中業を継ぎ、寛政年間に活躍した。

五代与兵衛は文化年中（一八〇四—一八一七）陶質青瓷を創製し、これから宮廷の調度品を納めることとなつた。

六代与右衛門は天保年中（一八二〇—一八四三）彩画陶器を造つた。これが栗田彩画の始めといわれる。

七代与兵衛は嘉永年代に、

八代与兵衛は文久年代に各々業をつぎ、

九代与兵衛（四代清水六兵衛の弟が養子となつた人）は輸出品を作つた。

然し余りに手をひろげて遂に帶山家を破産に追込んだといわれる。

高橋 道八（元文五年—文化元年（一七四〇—一八〇四））

伊勢亀山藩士の次男に生れ、宝暦年中京都に出て陶を学び、栗田口夷町に寓をかまえ陶業に従事する。名を光重、松風亭空中と号し通称を周平といった。彫刻を巧みとし、大雅堂、上田秋成、売茶翁等と交遊があり、亀甲内にセの字の印を用い、又道八の印がある。文化元年四月廿六日歿、行年六十五。

仁阿弥道八（二代道八）（天明三年—安政二年（一七八三—一八五五））

江戸時代文芸最盛の第二期を劃する文化文政の頃、陶芸の偉人奥田頼川門下の逸材に木米、道八、亀祐、嘉介等があつた。それ等の人々の中、木米は大陸陶磁の模倣に、亀祐は青磁にそれぞれ独特の技を顕わしているが、仁阿弥道八は独り異つた途を選んで日本趣味の種々の作品を残した。例えば楽焼に似たもの、仁清、乾山、又は光悦風のものなど優美絢爛たるものが多いのが特徴である。

法螺山人と号し、法螺具の印を用いているから道八は法螺をいう大言壮語の人物でなはいかと思われるが實際は全く反対で、極めて真面目な地味な人物で仏門に帰依しておつたなどから考えても、何か隠遁的な性質の持主であつたらしい。そして法螺山人と称したのは法螺具を愛好してよくこれを吹き鳴らし、薩摩の島津公から珍しい美しい法螺具を頂戴した事等から法螺具の印形を用いその中に道八と彫つたものなどがある。

道八の作品は楽焼に於ては楽家の人々をよく研究して赤楽、黒楽いづれも立派なものを作つており、又光悦写しなど見事なものを作っている。光琳風の模様を応用し乾山風の陶器を倣する等、これ等の芸風をよく咀嚼したものである。彼れ道八のものは抹茶趣味に生きて純日本風の雅味豊かなものである。彼は又、伊万里風のものも巧みで、彫刻もうまく、ひねりの像や禽獸の置物の如き、堂に入つたうま味を顕わしている。

彼は「道八」の書銘が多く、印には瓢箪形に道八と書いたもの、法螺具の中に道八とあるもの、仁阿弥と言う小判印、仁阿とだけの印、桃山の印、等々がある。文彼は名工なるが故に各地の大名から招かれた。紀州候から招かれて御庭焼を、薩摩の島津公に呼ばれて薩摩焼に京焼風を加味し。また讃岐の高松に行き、或は岡山に行き、又京洛では西本願寺で露山焼を、角倉家では一方堂焼を始め、晩年（天保十三年）に至つて五条坂の窯を其子に譲つて伏見桃山に窯を開いて隠居しつゝ尚作陶に親しんだ。

仁阿弥道八は、初代道八の長子で、弟は尾形家を継いで尾形周平と弥しこれまた名工であつて、淡路の賀集班平に陶磁の術を教えた人である。

仁阿弥道八は頼川に陶法を学び次に室山文蔵にも学んだとの事で、父の時代から三条辺に住んでいたが中年の頃五条坂に移った。そして四十才を過ぎて石山寺の大僧正の仏弟子となり剃髪した。仁和寺の宮から仁の存を又、醍醐三寶院宮から阿弥の二字を賜り、仁阿弥と号したのである。そして彼もまた父と同じく松風亭を号しておったが作品には松風亭は用いなかったようである。彼は安政二年に七十三才で歿している。仁阿弥は道八としては二代目である。

三代 道 八〔文化八年―明治十二年（一八一―一八七九）〕

幼名道三、名は光英、華中亭と号し、嘉永三年、東山窯に赴き指導し、高松候の命により陶法を教授したといわれ、又明治二年鍋島藩の召に応じ、有田に京窯を築き彩画を教えた。その作品では青磁雲鶴を得意とした。六十九才歿。

四代 道 八〔弘化二年―明治三十年（一八四五―一八九七）〕

名は光頼、華中亭と号し、京都府勸業場の御用係として公私大いに活躍した。五十三才歿。

五代 道 八〔明治二年―大正四年（一八六九―一九一四）〕

四代の子が幼少であつたので、甲賀の人、小川勇之助五代をついだ。四十六才歿

六代 道 八〔明治十四年―昭和十六年（一八八一―一九四一）〕

大正四年襲名、四代の次男で、号を華中亭、先代及び四代の陶法をつぎ、市立陶磁器試験場の伝習所を卒えている。染付煎茶器に名品がある。六十一才歿。

七代 道 八 現代道八である。

海老屋

海老屋清兵衛〔享保の頃（一七一六―一七三五）清水三寧坂に窯を築き、茶道具を焼いた。これが清水焼の茶道具を焼き始めた最初であると伝えられ、頼川、六兵衛（初代）もこの人に陶を習ったといわれ、（清水家が海老屋の屋号を名乗った）清水焼に一転機を画した人である、現在、五条橋東六丁目に住居する海老屋、山本茂一家の過去帳に、本家海老屋清兵衛天明七年（一七八七）歿とあるは、その二代目と思われる。山本家の初代（海老屋茂兵衛）は海老屋清兵衛の分家である。

海老屋茂兵衛〔天明二年―慶応三年（一七八二―一八六七）〕

本家、清兵衛の指導を受けて磁器の茶道具を製作、二代、寅之助〔文政元年―安政五年（一八一八―一八五八）〕は、茂兵衛より先に四十一才で早逝し、三代辰之助〔弘化元年―明治二年（一八四四―一九〇九）〕より竜山と号し、四代、由太郎〔明治元年―大正十五年（一八六六―一九二六）〕に至り、陶器を始め、現代（五代）茂一に至っている。

伝統のある名家であるが、代々生粋の陶工気質で、陶器造りに専念したらしく、資料も少ないのは残念である。

清水六兵衛

清水家は元文三年（一七三八）以来、二百三十年に亘り代を重ねて、現代六兵衛は、その六代目である。五条通の拡張により一部窯を移転したが、工房は五条橋東五丁目に、陳列所を東大路五条東に有し、内外に有名である。

初代 六兵衛〔元文三年―寛政十一年（一七三八―一七九九）〕

摂津之国島上郡東五百住村（現、大阪府三島郡）、農業、古藤六左衛門の子で、幼名を栗太郎、号を愚斎といった。十二、三才の頃京都に出て、五条坂窯元の人である海老屋清兵衛について陶を習い、又信楽に行つて研究を重ね明治五年（一七六八）東山区五条大和大路下ル東入附近で開窯した。

註 海老屋清兵衛に師事したので、家号を海老六（海老屋六兵衛）と称し、又代々海老の絵付で有名である。

妙法院宮の御庭焼を勤めて、六目の印。（六旦の印ともいう）を受け、又天竜寺の、桂州和尚の手書による六角に清字の印（清、大小二顆を受けて、爾後代々この印を使用している。円山忠孝、松村呉春、頼山陽、上田秋成等と交友、寛政十一年、六十二才で歿す。

二代 六兵衛〔寛政二年―萬延元年（一七九〇―一八六〇）〕

号を静斎、隠居して、六一と号した。十才の時父を失い、家業は一時中止の状態であつたが、文化八年（二十三才）亡父の跡をつぎ再興した。晩年には青華磁器を製作している、その銘印は（）が二重になっている。万延元年、七十一才で歿す。

三代 六兵衛〔文政五年―明治十六年（一八二三―一八八二）〕

祥雲と号し、清水家中興の名工と呼ばれ、明治初年真葛番山と共に東上し、横浜で石膏型の製法を習得し、幹山と共に研究したといわれ、明治



三代 六兵衛作 大燈籠

治十六年四代を襲名し、三代の手広い事業を引継ぎ主として土焼の茶器類を製作した。大正二年隠居して六居と号す。印は大徳寺牧宗和尚の書で、六角の清字であつた。交友に富岡鉄斎があり、その合作品もある。

五代 六兵衛 (明治六年—昭和三十四年 (一八七五—一九五九))

京都画学校及び幸野樸嶺について絵を学び、その一字を採り祥嶺と号した。明治三十五年頃から四代が病み、其代作をした。京都市立陶磁器試験場でマジョリカを習い、大正十一年、フランス、サロンより会員に推され、昭和二年第八回帝國美術院展覧会第四部の創設とともに京都から唯一の陶芸家として審査員に選ばれ、昭和三年には緑綬褒章、昭和六年にはフランス政府からエトアル、ノアル勲章を受け、又昭和五年には帝國美術院会員となつてゐる。昭和二年の即位大典には京都御所で、清水焼の御染筆に奉仕したので、これを記念として姓を、従來のしみずをきよみずに改めた。昭和二十年隠居して六和と号した。印は建仁寺黙雷和尚のもので、六和となつてからは浮上の印を用いた。昭和三十一年には生誕八〇年回顧展を開き芸術活動の深さを再認識された。昭和三十四年八月一日、八十五才をもつて歿し、全日付をもつて従四位勲三等瑞宝章を授けられた。

清水家の外戚、その他

清水屋七兵衛 三代六兵衛の兄に当り (二代目の長男) 五条橋東五丁目に居住した。

清水 六一 二代六兵衛妾腹の子であり、東山区桜町に居住し海老屋九十郎と称した。

浅見五郎助 先代五郎助が、二代、三代六兵衛の門下生で嘉永五年 (一八五二年) 祥瑞五郎助と称した。

沢村 東左 先代東佐が三代六兵衛の弟子で明治九年 (一八七六) 開業した。

古曾部焼との関係

大阪府高槻市内の古曾部焼は、その手法、作法、形状等が清水家と同様であるのは、初代六兵衛の郷里が近郷であるので、その指導によつたものであるといわれている。

四代六兵衛の弟は帶山家 (粟田焼) の養子となり大いに業を展げたが、後には帶山家破産の因をなしたといわれる。

和氣 龜亭

初代 和氣 平吉 (龜亭)

和氣家は代々、龜亭と号した。初代平吉は美濃の出で寛延六年 (一七四八) 五条坂上音羽町に開窯し、染付を苦心研究した。明和二年 (一七六五) 歿す。

二代 龜 亭 (宝永四年—天明七年 (一七〇七—一七八七))

文化年間、門下生を長崎に派遣し、藍鋳石・日向の釉薬 (灰) を求めさせて、染付を始めた。

三代 龜 亭

文政年間、磁器を製作し、当時、五条に青華が少かつたので名声を博した。

四代 龜 亭 (嘉永元年 (一八四八) 七十七才歿)

染付、赤絵で名声高く、門弟熊吉を全国著名の陶業地に派して磁器の製法を研究せしめ、有田の秘法を会得して、清水焼の発展に貢献している。

五代 龜亭

先代より磁器の製法を継承し、慶応の末年には海外にも輸出した。明治四年歿。

六代 龜亭

明治六年、勸業場御用掛りとなり同二十五年隱退。

六代以後、七代、八代と龜亭を継承したが昭和十年廃業、現代は福井で織物業を営んでいるという。

〔余 録 19〕

六代和氣龜亭の日記

嘉永五歲壬子初春より始まり文久二年壬戌九月で終つてゐる。半紙判で肉筆でこくめいに書いてあるが、日常のこと、祭事等が多く記してある。ここには陶業に関することのみを摘録する。(原文のまま)

○嘉永五歲壬子初窯二月十二日ノ切十三日ニ窯出、デキ皆宜敷^{イデ}愛度候。

○二月十四日裏梅ミ花盛ニ付来客有其姓名は江戸魁之園賣茶様中野氏平岡氏清風氏都合四人まねき誠懽陶敷日ニ而七ツ時より雨降り内には江りて夫より大キニさしにけり、

○十二月九日大佛宮様今辰之刻薨去唱物普請停止(中略)公儀ヨリ茶碗窯瓦窯の儀今十一日ヨリ十六日まで差とめ候尚又十七日朝より廿日朝迄差止メ

○嘉永六年、二月六日初窯ツメ切七日日没窯焼初午

○三月十五日焼屋連中於丸山正阿弥席山会相勤む五条組行事

○清水地主神主平勢氏より五条焼屋中に酒切手二枚持参ニ而頼に参り其に付焼屋中より金巻両に大轅老本竹馬老ケ奉納ス尤廿一日ニ拙宅下人荷持候

○七月廿日公方様(大樹公)薨御被近る、(中略)瓦並茶碗焼キ候義差扣候事、右之趣急ぎ相ふれ候もの也。

○八月廿七日窯屋迄につめきりて昼から窯たきつけ

◎嘉永七年甲寅

○六月十四日夜九ツ時半スギニ誠ニ大地震数度ユリ長ク其後小ユリツメ漸ク明カタ少々ヤム又翌日六ツスギニ式ツユリ一度ハ大ユリ(中略)

茶碗窯拙宅の窯未素焼窯オ茶瓶ツマリ有次十之間カラ式ツ崩翌日惣皆ヨツテゴモク捨ル窯出モ夕翌日外ニ表台三疊敷ニアリ道具モ崩其外ノカタツケ(中略)十五日朝大地震ニテ拙宅西庭燈籠コケル(中略)亀六九ツ窯崩(中略)綿屋窯三ツ崩(中略)井亀道具損失葉罐町○屋窯七ツ崩外ニ道具大キニ損失音字竈三ツ程崩外ニ道具モ損失若狭屋窯三ツ程崩清六式登ニテ五ツ程崩

清水坂少々アレ 栗田焼上窯少々アレ(下略)(この嘉永七年六月十四日夜の地震にて伊勢四日市、伊賀上野、信楽、膳所、奈良、木津、草津、大阪等の各地にて家屋崩壊、死者続出の記事あり)

○拙宅窯大地震ニ付崩十一ノ間十ノ間九ノ間半分崩十八日より普請ニカカリ初シメル、ツイデニ一ノ間西流天上ツキ直シ廿六日ニ出来ス、

○九月朔日岩太郎誕生ニ付鯛焼物昼飯日暮ニ入込人鯛ニネギ蛸ニテ酒ニテ呼ブ(中略)二五八窯サマ直シカカル、

○九月十九日大阪天保山海岸ニ異国船ヲロシヤ国屋スギニ渡来(下略)

○霜月二日窯焚ニテ一ノ間○焚上ニ下俄ニわき誠ニ困リ入候皆々内集リ材木ニ而ツツハリカイむしろ土ベニ而ぬらし其下リシ処アテむしろ八九枚其上土ベながし漸ク其ノ間ニ止目出度おさまり候

○霜月十二日昼から一ノ間崩処普請十五人ニ而渡し一の間二の間戸木ノ三ツ普請斗廿一日迄ニ出来致候尤老人前三百二十四ノ

◎安政二年乙卯元日愛度候近邊 御礼ニ参リ蔵六同道畫工王海僊宅儒者中嶋文吉殿宅ニ参リ祥瑞写クツ形酒飲宅ツツ贈り、尚同道ニ而畫工曉

園殿江子弟入スル尤礼金巻朱持参ス(下略)

○十一月九日御遷幸内見(中略)和宮様御縁組ニ付加興丁一統御祝儀拝領(下略)

○文久二壬戌八月廿四日実父平吉長男岩松事平吉ト改名家督相続ス、年三十四才(和氣平吉)

○明治五年壬申六月廿六日下京区第三組衣棚町地垣与兵衛二女ゑんヲメトル、

寛

差渡し 壺尺八寸 高サ 壺尺 青磁 角木鉢、値段 金廿兩

右之通ニ御座候間凡竈日数六十日余相懸リ申候間此の段宜敷申上候 亀亭 印

上様

右之義十月廿七日ニ右之品ヲさる人御詔ニ參候間左之通ニ相記申候

○調合控

朝鮮葉

天目黒

ドラサ 水 壺合

紅カラ

目分料

紅カラ

五百目

焼ミヨヲハン 三分

松アク

九 盃

紅ヤ灰

四升五合

ニカワ 八分

シラアク

壺 盃

チクラ

四升一合

墨

桃

桃 濃ク(コラク)

栗 三 盃

金

五 匁

天草

一杯

白絵 三 盃

玉

五 匁

珪土

テイト(程度)

山上 五 盃

唐

三 分

一生瀬

一杯

信楽 五 盃

唐

三 分

一生瀬

一杯

金石 八 盃

青磁(濃ク、極コラク)

萩

トノコ 凡十匁

メシナ

壺 盃ニ

紅カラ 凡一匁

生瀬

壺 盃ニ

いす 四 盃余

ア ク

壺 盃ニ

(本書は河合栄之助氏の所蔵品で同氏が母堂より譲り受けられたものである。)

(以上亀亭日記より抜萃した。文字は中々上手で相等の教養の有った陶工であることを思わせる)

欽古堂亀祐 (明和元年—元保八年(一七六四—一八三七))

かめすけ、又は、きすけ、と読み、文政、天保期の陶工で、伏見街道で土偶を作り、丹波屋亀助としても知られている。伏見人形の型は、亀祐の原型にならったものが多いといわれる。

註 「本朝陶器考証」には亀祐の所在を伏見街道一ノ橋下ル町と記されている。

亀祐は奥田頼川に陶法を学び三田に赴き三田青磁を指導す。交跡、楽焼及び青磁を作るのが巧みであつた。

亀祐の陶器指南(文政十三年刊)は有名である。

〔余 録 20〕

欽古堂亀祐と「陶器指南」

摂津の三田(さんだ)は九鬼家の城下町で、ここに産する青磁を三田青磁と称し世に知られている。この三田青磁を指導完成したのが京の陶工欽古堂亀祐で文化年代の話である。この亀祐はまた奥田頼川の門下生で木米、仁阿弥道八等と同門の一人であるが、木米等の人々が余りにも有名な為に亀祐の名は一般にあまり知られていない。

然し亀祐は京焼には忘れてならない恩人の一人である。後には「陶器指南」という当時の製陶法の著書が出版されている。これは我国陶業界に文献の極めて少ない中であつて異色あるもので、誠に珍とし、また宝とすべきものである。書は文政十三年の出版で、稲荷大社の宮司で古典に精しく篆刻をよくした羽倉亭翁の序文が書かれてある。この可亭翁は明治天皇の玉爾を刻つたといわれる人で、又文人画をもよくする文化人である。この人と亀祐との交友も密であり、亀祐は伏見街道に住んでおつた事にもよるが「一日訪欽古堂茶話数刻」と述べているのも、親しみの深さが感じられてゆかしい次第である。この「陶器指南」は全国的に出版書林の名が連なつており、どの程度普及されたか不明であるが、免に角斯道の指南書となつたものと見てよく、内容も「陶器指南」の名にふさわしく、支那古陶器のこと、原石のこと、釉薬のこと、絵具は下絵、上絵と分けて、また窯詰のことから窯焚の事まで簡単ではあるがよくまとまつて書かれており、京焼作陶には一つの指針を与えたものとして其功績を推奨すべきである。木米の支那書「陶説」翻刻よりは我国に即した書籍として珍重すべきである。

今其序文と目次を掲げる。

陶器指南

予幼キヨリ陶器ヲ製スル事ヲ好シニ撰津三田住神田某其功ヲ試ミン為ニ陶器山ヲ其所ニ開連綿タル事己ニ三十年総テ陶器ハ土石ヲ心トシ銅鉛或ハ塩灰ヲ粧トス然レドモ其土石並諸薬調合ノ分量ヲ知ラザレバ遂ニ陶器ヲ製スル事アタハズ、故ニ多年其分量始終ヲ試ミ製陶ヲ好ム人ニ示サン為細ニ奥儀ヲ記述スル事シカリ

文政十三年寅春

洛南欽古堂

目次

- 南京石出所事
- 本窯土焼事
- 石焼物古図事
- 石焼ロクロ図
- 素焼窯図
- 素焼器積様図
- 窯ノ内諸具図
- 向ノ吹出シ南京窯図
- 青磁薬石事
- 絵薬事
- 桃色薬ノ事
- 緑紅薬事
- 薬灰ノ事
- 青瓷十三品地土調事
- 南京焼地土並上薬事
- 南京古染付ノ法
- 虫食ノ事
- 黒メ砂ノ事
- 南京本窯十二通積様
- 窯内薬加減事
- 本窯内積様略図
- カワカシ窯図
- 石焼物作手数事
- 錦焼事
- 唐土事

- 京日岡石事
- 白玉事
- 錦焼薬調合事
- 白玉ナシ薬事
- ツラシ薬事
- 錦焼窯図事
- 交趾焼事
- 赤交趾地土並地薬事
- 白交趾事
- 交趾焼上薬事
- 黒交趾事
- 交趾焼様事
- 黒交趾焼様事
- 交趾窯図
- 黒交趾窯図
- 紅毛焼事
- 紺青合様事
- 本窯清水五条粟田焼事
- 土焼茶出所事
- 土焼薬ノ事
- 三島焼ノ事
- 古信楽仕法事
- 素焼窯図事
- 窯中火廻場図
- 土窯本窯図

目次終

以上の通りで、多くの図を示して丁寧書いてある。陶工が自分の覚書として秘録を残したものはあつても、これを出版公開したものは京焼関係では唯一のものであろう。

亀祐が頼川のすすめに依つて三田に趣いたのは卅七才の頃で三田からは木米をといつて来たが、頼川は木米を派して青磁を造らせては、大陸のものと同違ふ恐れがあるからと亀祐を派遣したとの事である。亀祐の作品は残されているものも少ないが、其技巧は精緻を極めたものが多く、彫刻のものなど驚くばかり整つたものである。亀祐は青磁の他に交趾写し雲鶴、三島手なども作つてゐる。尚三田から帰つてからは伏見人形の原型を作り、亀祐形として古雅なものが残つてゐる。

亀祐は晩年陶墓を造り祖先を始め、自分より早逝した妻や子供の霊を祭つた。自分の戒名も記してあり、六角の立派な交趾写しのもので美し

い絵具で彩色した回転する珍しいものだという。

龜祐は七十三才で歿し墓は伏見街道一の橋の専称寺にあり後継者もこの附近に中村姓をなのつて住んでいるとの事である。

青木 木米 (明和四年—元保四年(一七六七—一八三三)六十七才歿)

木米の先祖は尾張より京都に移り、祇園の繩手で木屋という茶亭を営んでいた。幼名を八十八といい、父の名をついで佐兵衛と改めた。号には木米、九九鱗、百六敢人、古器観などがある。

木米は大阪で、清人の書、朱笠亭の陶説を読んで陶を志し、瀬川について学び、唐土の釉法を修得、青花白磁(染付)及び青瓷の法をきわめ、陶説を翻刷出版した。

享和元年(一八〇一)紀州藩に招かれ、文化三年(四〇才)には加賀藩主に招かれ、金沢郊外、春日山窯の開窯を指導した。又、文化二年(一八〇五)六月二日(一説には文化五年)三十九才のとき、粟田青連院宮の御用窯を仰せつけられたという。天保四年歿、碑は粟田青連院の門前にある。(大正十年洛陶会建立)

〔余 録 21〕

菟道朝激の図(木米描く)

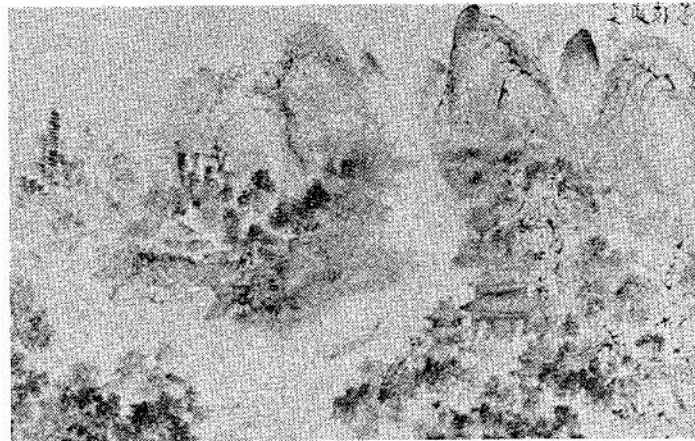
京の陶工木米(もくべい)は製陶の術に優れておった一面、文人として絵も描き詩も作るという文化人であつた。人となり清廉高逸その描くところの山水花卉は自から凡俗を超脱し、素朴な筆致の間に清高な風韻の流露を見るのである。この菟道朝激図は彼が屢々好んで画くところでその繊勁な筆致は枯れ寂びていながらほのかな秀潤な趣を漂はしていて、清雅な滋味を覚えしめ、またそこには人間的な淳朴さの中に一種の飄逸な気分を潜めて、和興愛すべきものを感じしめる。

木米は殊に書を愛し、山陽(頼氏)をしてその該博を嘆せしめた程である。彼の画面には所謂書卷の気をも脱却し、天真独朗の境致を得ていることにおいて、日本の南画に於ける特殊の存在である。宇治の朝あけを画いた図で二三同じ画稿のものが残っているが、いずれも秀れたものだとのことである。私は彼の陶器よりも寧ろ彼の南画を賞賛したいのである。

木米は清(支那)の朱琰源の著書「陶説」を見て陶工になろうと決心し、その陶説を翻刻して出版している。その頃支那書を読破し頼山陽や田能村竹田などの文人墨客と親交があつたことなど、まことに異数の陶工であつたことがうかがわれる。

彼は文化文政頃、今から約百五十年前の存在であつて、奥田瀬川の弟子となつて陶磁の製法を習つたのは三十四五才の時であつた。英惻な彼はそれ迄にも見覚え、聞覚えで自ら研究していたことであろうことは、彼が少年時代、古銅銭の鋳物を覚えて、古銭の贗物を拵えたなどからも推察される。木米という号は彼が青木八十八という名前であつて、其、青木の木の字をとり八十八を米の字に組合せてこしらえたものである。

彼はまた百六散人と号した。これは木は十八である、米は八十八である、この十八と八十八を合せて百六散人としたのである。薺米ともいつたがこれは彼が薺になつてからである。なお彼は九々鱗、古器観、停雲樓などの印をも用いている。木米の陶器は支那写しのものが多く、又その写しが上手で、支那のものと見誤るのを見て悦んだというから銘印を捺さないものが多かったよう、従つて散逸してしまつたものの多いのは惜しいものである。彼は彫刻ものや型物が得意であつて、今も其型が残っているのが少なくないとの事である。彼は師、瀬川の赤絵風のものとは異なつた作品が多いのもその特長である。学問もあつたから抱負も大きく、かつて仁清乾山を評して「近世仁和清兵衛、乾山尚古なるもの亦名工と称す。仁清はよく陶車を用いて器を作り、当時茶家の貴重するところとなるも、惜しむらくは其釉法曇色にして光沢少く、乾山は西洋器の釉法を学んで成す事能はず、僅に坯体を作り得たるのみ」と罵倒している。仁清は裡風、有職風のごく上品な日本趣味のもの、乾山は脱俗した雅味を主とした抹茶趣味、禅味に



青木木米 菟道朝激の図 日本美術大系 第5巻 近世絵画篇所載(大原家蔵)

富んだもの、木米の方は煎茶趣味の勝つた支那風のもので街風に富んだ模倣が多い。各々其の特長を生かしている。

木米の墓は鳥辺山の中腹にあるが「識字陶工木米之墓」と書かれてある。識字とは文字をよく知っている、つまりもの知りという意味で、篠崎小竹山人の筆である。陶を志す青年は一見の価値があるだろう。

尾形吉三郎（周平）〔天明三年—天保十年（一七八三—一八三九）〕

初代道八の三男で、染付、赤絵に長じ、得意は急須であつた、淡路の加集珉平を指導して、淡路焼の隆盛に尽力した。

入江 道仙（道仙化学製陶所）

寛政年間（一七八九—一八〇〇）初代道仙、陶磁器の製造をはじめ、三代道仙は御所の用品を納入し、明治四年には京都舎密局の、ついで京都勸業場の註文をうけ、明治八年頃からは舎密器械の陶磁器を主として製造した。明治十一年、大阪造幣局の「るつば」製造をはじめ、それよりは理化学用陶磁器を専門に製作した。

大正の初期、欧州大戦勃発し、ドイツより化学用陶磁器の輸入がとまったので、多年研究の成果を応用してその製造につとめ、大正八年三月、石炭窯を築造、又機械ろくろ、トロンメル、ミル等の機械を導入して製造方法を著しく改善した。

現、道仙化学の発展と名声は三代道仙に負うところが大きく、その製品は蒸発皿、坩堝、ビーカー、ビュツネル漏斗、乳鉢、真空蒸溜鍋、燃焼管、タンマン管、デビル炉用るつば等である。

太田垣蓮月〔寛政三年—明治八年（一七九一—一八七五）〕

幼名を誠子といい。生後直ちに太田垣家の養女となる。文化四年（一八〇七）太田垣家養子と結婚したが、運悪く、三度結婚し、又子女も早生し文政六年（一八二三）剃髪、天保三年（一八三二）頃より陶器造りを始める。手造りの急須、抹茶碗、水指等に面白いものが多く、絵と歌を書き入れた花挿、土瓶等は、雅味があり、今でも之を摸した製品が、蓮月風として愛好されている。

又、鉄斎が蓮月方（白川村心性寺）に寄寓したのは彼の二十才の頃で（蓮月六十五才）、その合作も残っている。

永楽善五郎

永楽家は西村氏が本姓であり、代々善五郎を称え、土風炉師であつた。

初代は奈良、西の京に住み、二代宗禪は、和泉の堺に、三代宗全は京都下京六条東洞院から室町上立売附近に移り、家業の土風炉をつくつていた。四代宗雲、五代宗釜、六代宗貞、七代宗順、八代宗円、九代宗蔵と続く。

十代了全〔天保十二年（一八四〇）歿〕

了全と号し、楽了入に楽焼に学び、家業の土風炉の外に陶器の製作もはじめ、和漢の古器を模造して頗る精妙であつた。

十一代保全〔寛政七年—嘉永七年（一七九五—一八五四）〕と十二代和全

「大日本永楽造」と銘を入れた金欄手の磁器、赤絵具で一ぱいに塗つたものに金粉で鳥、獸、魚などを描出した見事な、誠に眼のさめる様なもので、これは日本製だぞ、支那のものではないぞとの自信を持つて造つた其意気は、古器を模倣して我事足れりとしておつた人とは比べものにならない立派なゆきかたである。この作品が即ち永楽保全の陶器である。そうして他にも祥瑞写—仁清写—交趾写—等可ならざるなき作風は、仁阿弥道八と伯仲する名工であつた。

永楽保全の時代、世は贅沢を極めたので、幕府はそれを戒めるため金や銀の細工ものを使用することを禁止した。時に保全は金欄手を応用して響の玉を金色にしたものを作つて売出したところ、祇園あたりの芸者仲間に流行し始めた。時の役人は法度にふれるものとして保全を取調べたところ、保全はこれは金や銀の代用品としてかくかくの方法で作つたものであると説明したところ、其弁明が通つて罰せられるところかかえつてはめられて面目をほどこしたという逸話が残っている。

永楽家は土風炉を作るのが家業であつたが、保全の父の代に楽の了入に京焼を作ることを習い、以来陶器作りに進んで交趾写しや染付にまで進んだのである。だが保全もまた家業の煎茶炉を作つて色々の名作を残している。其作品の優れていることから時の公候富豪の家に出入して珍宝名器に接する機会が多かつたので、それを見聞し、或は工夫して自分の作品を向上せしめた研究心は他の追従を許さないものがあつた。

「以陶世鳴」と言う染筆を有栖川宮から頂いて、それを書銘として使つたこともあり、紀州候の召によつて和歌山に趣き御庭焼を指導して「永楽」の銀印を、また「河浜支流」の金印を拝領して使用している。紀州では偕楽園焼を、彦根では湖東焼、また高槻では高槻焼、大津では長等山焼とも称する湖南焼を創めたり指導したりして京の名陶工の名をほしいままにしている。

永楽というのは支那の陶説や詩の中に永楽年代のものが優品だとあることから、保全の父、了全がそれをとつて永楽と呼んだもので、本名は西村で戸籍上永楽を本姓としたのは保全の子、和全の時からである。

京の上立売附近に風炉図子と云う町名が残っているが、此処は永楽の祖先（三代目）が奈良から移つて来て土風炉師を始めた処である。保全は永楽家即ち西村家の十一代目に当り、了全の養子で本名は善五郎である、西村家は代々善五郎を名乗っている。

保全は漢籍、和歌、絵画等を時の名家に学び、又参禅しており、洋学にも志したとのことで、非常に向学心のある研究家であつたようで、晩年尚研究を怠らず、其研究費の不足から子の和全と意見が合わず、京を去つて江戸に下り向島に開窯せんとしたが良い土が得られず、断念してまた京にもどつたとのことである。

保全はまた孝行者で養父をねぎらい、茶室や庭園をつくつて老後を慰めており、敬神の念も厚く幼時より神社詣を欠かさなかつたとのことである。

保全は嘉永七年に歿し其子和全があとを継いだ。この和全と同時に宗三郎回全と云う者がいる。彼は保全の養子でまた名工であり、和全と力をあわせて永楽家の隆興に努め、御室窯（仁清窯）を再興している。宗三郎の名はあまり知れていないが「おむろ」「大内山西園」の銘印を捺した作品が残っており、西園は彼の雅号である。和全は晩年高台寺協の菊溪川の辺に住んで菊谷焼を焼いたりしておつた。

保全は永楽代々のうち最も秀れた名工であり和全、宗三郎またこれに次ぐもので、永楽家は代々其業を継ぎ今も尚榮えている。

真葛 長造

〔寛政八年—嘉永四年（一七九六—一八五二）五十五才歿〕
姓は宮川で、その祖先、長閑斎は近江阪田郡宮川村より、（慶長年間一五九六—一六一四）智恩院石橋町にきて楽焼を焼いていたが、十代目の

長造は、木米に師事して陶法を習い、真葛ヶ原に開窯して真葛焼を始めた。

その子の長平は早世し、長平の弟、寅之助（天保十三年—大正五年（一八四二—一九一五））が万延元年（一八六〇）家業をつぎ、明治三年（一八七〇）横浜に行き窯を開き、香山と号し、陶磁を製作し、明治二十九年、帝室技芸員にあげられ、同三十年には緑綬褒章をうけている。大正五年、七十五才歿。

清風 与平

初代 与平

〔享和三年—文久三年（一八〇三—一八六三）〕
号を梅實、加賀藩士、保田弥平の子で、文化十一年頃京都に出て、二代道八（仁阿弥道八）に陶を学び、文政のはじめ、師の命により、桃山の三夜荘に窯を築き、同十年頃に五条橋東四丁目に開窯して、楽焼、染付、朝鮮写、白磁、彩画磁等を焼成した。弘化三年岡山藩（池田候）にまねかれ、虫明焼の指導をした。

二代 与平

〔弘化二年—明治十一年（一八四五—一八七八）〕
五溪と号し、父の業をついで各種磁器を製作したが明治十一年三十四才で早逝した。

三代 与平

〔嘉永三年—大正三年（一八五〇—一九一四）六四才〕
二代与平の妹、くまの養子で、兵庫県生れ、清山、晟山、晁浦等を号とし、太白磁、其他の釉法の改良に努め、明治二十六年、帝室技芸員に推され、名工としてその誉が高かつた。

四代 与平

三代の次男で明治四年出生、大正三年業を継いだ。

小川 文齊（文化五年—明治十八年（一八〇八—一八八五））
小川久左衛門（通称文助）は加賀能登郡の陶工で、各地を遊歴し、天保五年、有田では築窯法を研究し陶技をみがき、同十四年に京都に来て、亀屋平吉に雇われ、その命を受けて彦根の湖東焼の築窯をなし、又ろくろ工の徒弟を養成した。嘉永四年頃一条の宮の命により、山城相楽郡鹿背山の隠谷に築窯し、棟梁を拝命、優良品製作の功により永世禄を受けた。又安政三年には紀州男山に築窯した。明治六年には、京都五条坂東五丁目で、二代目鋭之助と協力し、文齊と号して、内地向磁器及び京都伊万里焼を造る。この間明治十年四月、石川県の依頼で同地に赴き、築窯其他を指導し同年帰京した。明治十八年七十六才歿。

二代目 小川鋭之助

多年父と共に陶業に従い明治二十年歿す。

三代目 小川卯之助

〔慶応二年—昭和十四年（一八六六—一九三九）〕
改名して文齊と称し、従来製作した貿易向き今万里焼は販路が縮小したため、栗田素地を製する傍ら、貿易物の直売をなし、又内地向きとして割烹店用磁器製造をなす。

本多 佐平（初代）

初代佐平は宝永末期（一七一〇頃）その師である丸屋庄兵衛（二代）より鐘鐺町の窯を譲り受け、その屋号をついで丸屋佐平といった。（一説には窯持ちとなつたのは文政二年（一八一九）といわれる）大仏茶碗を作つたと言われる。

水色紺青	一唐 土	拾 匁
一紺 青	拾 匁	
キビ色		
一白 玉	拾 匁	
一唐 土	老 匁	
一呉 州	五 分	
トケ黒		
一白 玉	拾 匁	
一呉 州	拾 匁	
一唐 土	拾 匁	
赤染吉左衛門(下地)		
一黄 土	拾 匁	
一白 画	三 匁	
一唐 土	五 分	
赤染吉左衛門(上薬)		
一白 土	拾 匁	
一唐 土	三匁五分	
道八上薬		
一唐 土	拾 匁	
一石 キ	三 匁	
黄瀬戸		
一朝日印紅ガラ	三 匁	
一唐 土	百 匁	

一石 キ	拾 匁	
一白 玉	七 匁	
五合紫		
一紫 玉	四 匁	
一唐 土	拾 匁	
熊川上薬		
大極上々清々		
一石	百六拾目	
加賀つらゝで		
一白ゑんしよう	百 目	
一ほうしや	二十目	
地薬目方		
一百目内ゑ		
一赤金でい六匁五分入		
るり薬		
一目方 百目の内に		
一こす 三分入		
六七度焼かへし		
少々づゝゑんしよう入		
茶あく度々		
塩けぬけばよろし		
道仁清黒(道八の仁清の意)		
一川(加茂川石)	百目	
一白 玉	七十目	
一紅	五分	
右ハ調合シテ能々するほどよろし		

道仁清黒(道八の仁清の意)

一川(加茂川石) 百目
一白 玉 七十目
一紅 五 分
右ハ調合シテ能々するほどよろし

道黒薬(道八の黒薬)

一川 百七十目
一白 玉 百目
一唐 土 四 匁
右は一通り但し極上にて唐土白玉を先に調合して其中に栖霞を少々入桃色位のいろ合にして置く、加茂川を加へ但しベウコウの薬はぬり様に有併ぬりは三べんにてよろしく尤まく薬は同薬にて御座候

美の勘

一けいん石 壹 匁
一白 玉 拾 匁
一唐 土 六 匁
けいん石斗四目斗する

江戸紫

一紺 青 四分
一白 玉 壹 匁
一唐 土 八 分
右はけいん石合せを老々入紫色

桃色下白

一白 画 唐土
上はつやのである迄見斗

白画合

一白 画 壹 升
一生 瀬 壹 升
青 磁 三 升
一赤 石 三 升

一石 キ 拾 匁
一白 玉 七 匁

五合紫

一紫 玉 四 匁
一唐 土 拾 匁

熊川上薬

大極上々清々 百六拾目
一石

加賀つらゝで

一白あんしよう

一ほうしや

地薬目方

一百目内系

一赤金でい六匁五分入

るり薬

一目方 百目の内に

一こす 三分入

六七度焼かへし

少々づゝあんしよう入

茶あく度々

塩けぬけばよろし

道仁清黒(道八の仁清の意)

一川(加茂川石) 百目

一白 玉 七十目

一紅 五 分

右ハ調合シテ能々するほどよろし

一甘 草 七 合

一いす 灰 六 合

土焼黒薬

鉄 三百目

一紅 唐 八 升

生瀬十分合

一白 薬 三 升

萩 一 升

一米わら灰

ナマセ 四 升

一白 薬 三 升

青 磁 壹 升

大極上々

一録 青 三 升

一はぎ 薬 三 升

錆 薬 三 升

一黄 土 三 升

ナマセ 壹 升

一白 薬 二 杯

瀬戸黒 十 杯

一生 瀬 二 杯

一紅 がら

朝鮮薬

一とうぎの灰

一生 瀬 壹 斗

人形手青磁
一赤 石 七合
一地灰 白あくの事 拾匁
一白 玉
焼場二ばん上のせ
南蜜ノ内の薬
一ふらすこ 十ぱい
一紅から 十ぱい
同南蜜外の薬
一タ レ 五はい
一キバイ白あく 五はい
外に朝鮮の薬ヲ南蜜ニ掛ル
松本萩
一生 瀬 五合
一ふらすこ 五合
一木 灰 四合
古 萩
一餅わら灰 七合
一白 あく 七合
一生 瀬 三合
右はあさ色土一筋掛出致べし
真伊羅保薬
ナマセ薬
一十はい八はいの薬

黄伊羅保の薬を少し入べし
真井戸薬
目四ツ五ツ有内外共
一此土ニ而青キ調合すべし(青素地)
上薬は常の上薬よし、薬下に白絵のじやのめすじ此はけにてぬる
本窯赤画
一白 画 二匁
一赤でい 七匁
右ハ二品合よくくするあくをぬくべし
黄伊羅保
一紅から二ても
水たれ二ても
なまあくよし
かわけ 魚屋
一生 瀬 七合
一伊須 灰 八合
青井戸
但し古刷毛目薬の同薬
但し青井戸ニハ青磁薬
少々入よし
道八古萩タレ薬
一ふらすこ 七合
一なま 七合
一なま 七合
一白 あく 四合
焼場よわき所にてよし

るり本窯

一並 薬 四匁
一紺 青 六匁
黒 薬
一竹 灰 七合五合
一水たれ 七合
一並 薬 三合
八寸
一石 四合
一録 青 一斤
一土 灰 四合
青 薬
一石 七合
一録 青 七合
一餅わら灰 七合
一土灰 白あくの事 七合
青 薬
一石 七合
一わら 灰 八合
一土 灰 八合
一白 録 百匁
青磁土
甘 草 四匁
信 藥 四匁
水たれ 二匁
ちく ちく 二匁

仁清土

一瀬田木くさり 七分
一ちくち上々 三分
一並極上々土 三分
一白 画 二分
南蜜土
一窯中ノ砂 七合半
一よわき赤土 八匁
一すみ入
古刷毛目土
一赤 土 八匁
一たれ 二匁
中ふるい粉但しとび石大小少々入又鉄ぶん少々入そば也
又ハそばで二なる土
魚屋土
一赤 甘草 五匁
一水たれ 七匁半
一信 藥土 三匁
ちりめん出来よろしく見合見るべし
朝鮮土
刷毛目
但しとび石有
画唐津
一地 土 九分
一赤 甘草 三匁

奥棚なまの内ニよく
かわきて水へ底斗
つける二三べん水につけ
土あじ出しなまやけよし
真伊羅保

一の間奥上のせ

荒熊取土

タレ 老貫

赤甘 三貫

浜砂入

五色砂入

南蛮土

一荒 土地

一タ レ

一炭

但しふるいこすべし

よい所ニ而焼べし老

の間ど井の上のせ

魚屋 ふるい粉

十貫
四貫
五貫

地土 六
熊取 四
タレ 三
赤甘 四

地土 六
熊取 六
赤甘 四

御本半洲
炭葉ハふを出し

炭少々入
赤甘 四
地土 四

老の間奥の下棚
朝鮮唐津
尤朝鮮葉
萩葉ながし
老の間中なみさや

真井戸

荒地土 五
赤甘 三
大石小石入

老の間中並ねさや

青井ふるい粉

老の間火前上さや

絵フゴ

本口白 五
白絵 三
熊取 老半

熊川

本白石 四
白総 三
熊取 三

中並上さや

金海

木ぐさり 五
赤甘 六

老の間中並ねさや

古萩

上の間奥の上ノセ

荒地熊取 五
赤荒 四
タレ 三

古三島 ふるいこ

地土 六
水草白土 三
水タレ 四

赤甘 三
浜砂入

焼附諸色伝書

赤絵

白玉 拾
唐土 貳
紅唐 老貳分

紫

白玉 拾
唐土 拾
石キ 拾

モヘギ

白玉 拾
唐土 拾
石キ 拾

同(モヘギ)

唐土 拾
石キ 貳
ロクシヨウ 老貳分

ル

コンジャウ 七
白玉 拾
唐土 拾

黄

唐土 拾
白玉 拾
唐白目 拾

石キ 貳分五厘

黒

白玉 拾
白ロク 四
唐土 五

石キ 貳
白玉 五
唐土 五

モヘギ

唐土 五
石キ 貳
ロク 貳

紫

唐土 拾
玉 三
石 貳

赤絵

玉 拾
唐土 三
紅唐 老貳分

同

玉 拾
唐土 拾
ウス紅唐 五

桃色合方

一ポットハス 五厘 代リ分リ文

一唐 上

一白 玉

右ポットハスト白玉五分とを先よくすりて都合に入るべし

又法

一ポットハス

一白 玉

右は誠にうすくぬるべし

右何れもつかひ方は伊勢エビせなか斗水ニ而たき出し捨る次にエビ水五合
二三日斗つけ置此水を用るべし

右盛上ケ薬

日光電壺石 壺斗
イス灰 五件
同法同領岡村之産

白 玉

唐土 拾分

紫石 四升

唐土 三分

天草 六升

石 四分

白 拾分

イス 五升

唐土 拾分

石 三分

同領電壺石 壺斗

ゴス 三分

唐土 拾分

右土薬妙也

石 三分

唐土 拾分

同石地ニ成極白キ物出ル也

録 青

唐土 拾分

菰 葉

唐土 拾分

石 三分

ワラ 灰

唐土 拾分

石 三分

白 アク

唐土 拾分

石 三分

生 瀬

唐土 拾分

石 三分

萩 葉

唐土 拾分

石 三分

生 瀬

唐土 拾分

石 三分

上々木 灰

唐土 拾分

石 三分

ふらすこ 青地

唐土 拾分

石 三分

白 あく

唐土 拾分

石 三分

生 瀬

唐土 拾分

石 三分

ふらすこ

唐土 拾分

石 三分

水ロクシヤウ

唐土 拾分

石 三分

(以下略)

唐土 拾分

石 三分

水ロクシヤウ

唐土 拾分

石 三分

水ロクシヤウ

唐土 拾分

石 三分

水ロクシヤウ

唐土 拾分

石 三分

水ロクシヤウ

唐土 拾分

石 三分

水ロクシヤウ

唐土 拾分

石 三分

水ロクシヤウ

唐土 拾分

石 三分

水ロクシヤウ

唐土 拾分

石 三分

水ロクシヤウ

唐土 拾分

石 三分

水ロクシヤウ

唐土 拾分

石 三分

水ロクシヤウ

唐土 拾分

石 三分

水ロクシヤウ

唐土 拾分

石 三分

水ロクシヤウ

唐土 拾分

石 三分

水ロクシヤウ

唐土 拾分

石 三分

水ロクシヤウ

唐土 拾分

石 三分

水ロクシヤウ

唐土 拾分

石 三分

水ロクシヤウ

唐土 拾分

石 三分

水ロクシヤウ

唐土 拾分

石 三分

水ロクシヤウ

唐土 拾分

石 三分

水ロクシヤウ

唐土 拾分

石 三分

水ロクシヤウ

唐土 拾分

石 三分

水ロクシヤウ

唐土 拾分

石 三分

水ロクシヤウ

唐土 拾分

石 三分

水ロクシヤウ

唐土 拾分

石 三分

水ロクシヤウ

唐土 拾分

石 三分

水ロクシヤウ

唐土 拾分

石 三分

水ロクシヤウ

唐土 拾分

石 三分

水ロクシヤウ

唐土 拾分

石 三分

水ロクシヤウ

唐土 拾分

石 三分

水ロクシヤウ

唐土 拾分

石 三分

水ロクシヤウ

唐土 拾分

石 三分

水ロクシヤウ

唐土 拾分

石 三分

水ロクシヤウ

唐土 拾分

石 三分

水ロクシヤウ

唐土 拾分

石 三分

水ロクシヤウ

唐土 拾分

石 三分

水ロクシヤウ

唐土 拾分

石 三分

水ロクシヤウ

丹 山 家

丹山 青海 (文化十年—明治二十年 (一八一三—一八八七))

青海は丹後、熊野郡の出身、嘉永四年 (一八五二) 栗田中之町で開窯、同六年青蓮院宮が陶器物産会所を設け、その専業を命ぜられてから陶器商を兼ねることになった。明治五年九月には「陶器弁解」(本書は京都府の依頼により編輯したもので立派な図解である)をあらわした。

丹山 芳太郎

青海の長男で元治二年父業をついだ。

丹山 陸郎

慶応二年 (一八六六) 兄、芳太郎について、父の業をつぎ、明治初年に紀州の瑞芝窯に、同六年には独乙人ワグネル博士に率いられて奥国万国博覧会に出向し水金を持帰りその新研究に入っている。

水越与三兵衛

もと京都三条の豪商の出で、中年から製陶を学び、文政頃 (一八一八—一八二九)、五条橋東六丁目に開窯し、伊勢屋といった。号を調和軒と称し、はじめ、岡崎村神楽岡の、文山 (文山は楽焼をよくし、又写しものに巧みであつたと云う) に学び、染付、楽焼等を作っている。二代は染付や上絵をよくし、三代は万延元年頃早世し、絶家となつたという。

註 一説には、初代は五条坂の西落町に住み、天保六年龜亭の隣地に築窯し、欽古堂亀祐もこの窯に通つたといわれる。

奥田 頼川 (宝暦三年—文化八年 (一七五三—一八一二))

奥田赤絵で秀抜な筆緻で花鳥の絵が描かれ其筆使いの軽妙洒脱、鳥は將に飛び立たんとし、花はまさに咲き揃つた奔放自在雄健其ものの図様は、手本の明 (みん) の赤絵皿の比ではなく其赤絵具の渋いくすんだ色も大陸のものと遜色なく、磁体は厚手で重厚、釉薬は少し青味を帯びて厚ぼつた、蝕喰 (むしくい) のはつれ具合も自然らしく、高台の中には頼川の赤書銘がある頼川得意の作品である。頼川はまた稀に交趾写しを作り古染付写しの雅朴なるものもある。これ等頼川のもものは、多くは建仁寺塔頭の寺院に保存されたもので商品として売出したものでないとの事である。

さてこの頼川とはどんな陶工であろうか。京焼の祖、仁清や乾山が独自の日本風の陶器を始めて以来其伝統をついで大した進歩もなく過ぎて行つ

た時代が続いた後、文化文政の徳川末期の開花時代に至つて突如、奥田頼川が顕われて京都で初めて磁器を焼いている。頼川は明の帰化人の子孫だという事で、洛東建仁寺山内の清住院に寄寓しておつたが中年の頃、大黒町に住む丸屋と云う大質商に入家して質商を営んでいたが、彼の三十五六才の頃、家を次子に譲つて製陶に志したということである。頼川が誰に師事して製陶を習つたかに就いては諸説紛々だが、どうも独創説が強いようだ。といつても建仁寺は栗田に近く其辺の京焼風の製陶は常に見ていた事であらうし、奥田家は豪家で、家柄として学問はあつたらうし、それに建仁寺は当時五山の一で支那大陸との交流も密であつたらうから、支那の書籍も陶磁器も手に入り易く、又茶碗ぐすりと言う品目が輸入されたと伝えられるから、陶土も九州から持帰つて、彼が独自の研究に依つてはじめられたものであらう。

先にもいつたように、頼川は商品を目的としておらず、自分が住まつた建仁寺山内の塔中の常什器具や親戚知友に贈るものを作つて楽しみとしていた様で、遺品もこの関係以外非常に少なく、世間には余り知られていない。然し頼川の京焼に於ける存在は大きなもので、あの立派な磁器を京焼の中に押立てた功績は仁清、乾山、木米にも劣らぬものである。否寧ろそれ以上に見てもよいのではなからうか。

彼の功績はそれのみならず、門下生から木米、亀祐、道八、嘉介等の名工を輩出している。これ等は各々独自出藍の誉ある者とはいえ、其指導よろしきを得て天稟の材能を伸ばさしめた頼川の偉さが実のせられたものと思う。木米には支那陶磁各種類の模作を、亀祐には三田の青磁を、道八には染付を、嘉介には交趾、御本などを、各々其得意とするところを指導啓蒙したところなどよく師としての範を垂れている。

尚頼川は赤絵具を細磨する為に盲人を使つて根氣よく絵具をすらせ、啞者を使つて釉がけや絵をかく手伝をさせたとの伝説がある。不幸な人々を救済する愛情の一端をも示したものか温かい心持がする。

頼川の作品は古染付、呉須赤絵、交趾写し等であるが、交趾写しは極て少なく建仁寺及び其塔頭にある二三に過ぎない。これには落款もない。呉須赤絵は彼の最も得意とするところ其遺品もまた比較的多い。彼の作品には赤または呉須で器物の底裏に書銘で頼川とするしてあるが、たまには彫刻もあり、また稀に陸方山の落款のあるものもある。陸方山は彼の別号である。尚無落款のものも多いようだが、彼の雄揮輕妙な筆致と、器物の底に釉薬を掛けない一部を残して磁坏を顯しているなど特長が明らかで、手本の明(みん)の赤絵ものとの見分けも割合にやさしいものがある。

岩倉山吉兵衛

初代吉兵衛(文久二年(一八六二))

宝暦年間、岩倉より栗田口、三条東町に移り、岩倉山と号し、鋳屋と称した。宝暦五年には將軍、徳川家重により、御用茶碗を錦光山とともに試作して納め、これより毎年調進することとなつた。

二代は、文作と号し明治七年歿しその後断絶している。

幹山 伝七(文政四年—明治二十三年(一八二二—一八九〇))

瀬戸の出身である。

湖東焼に井伊直弼が名工を招致したとき伝七は安政四年閏五月二日に彦根の御抱となり細工も絵画も共に優れた腕前があつたから、同六年六月廿八日二人扶持を給与され、文久二年閏八月湖東焼の廃窯まで勤務した。同年九月京都靈山に移つて磁器の製造を始め、一時明石屋初太郎の家にあつた。其家は産寧坂井上柏山(故人)のおつた所である。後、慶応年代に至り産寧坂興正寺の前に古窯を築き磁器を製造した。

元治元年に華頂宮の御用品を焼成し慶応三年には陶工中で頭角を現わすに至り明治元年に京都府庁の御用品を焼成した。明治三年十二月京都府庁は勤業場内に舍密局を創設し独乙人ワグネルを聘し、専ら理化学を教授し、これを製陶上に応用することを計つた。府参事榎村正直は幹山の技巧を賞讃して大に期待するところがあつたから、ワグネルは先づ幹山にコバルトなど十三種の西洋絵具の試用を囑託した。彼は細心研究して試験の結果頗る良好な成績を得た。これが西洋絵具を我国製陶上に使用した始めである。ここで幹山はワグネルから西洋絵具を多量に買入れ、殆んど一代これを使用したとのことである。

明治四年宮内省の御用品を仰付けられ、東京銀座四丁目に支店を設置し用命の便宜をはかつた。明治六年に開設される壤太利万国大博覧会に、陶磁器の出品を府庁から幹山等九名に勧誘があつたとき、彼は出品者にワグネルから買入れた絵具を分与して使用方法を指示した。これはわが陶磁器を始めて海外博覧会に出品したもので此時、幹山は銀牌を得た。

明治五年五月、京都に始めて博覧会が開催されて会場は建仁寺、智恩院の二ヶ所であつた。智恩院には新古美術品を陳列し、明治大帝の臨幸があつて、陶磁器では幹山が唯一人御買上の榮を得た。其品はコーヒ碗皿等九種であつた。

明治六年外国の貴賓を接待する為に東京に延遠館が設けられ、宮内省から幹山へ洋食器七十五種の焼成を命ぜられた。そこで彼は、府知事や有力者の後援を得て大工場を建設することとし、先づ地所を産寧坂興正寺の北隣(現京大和別邸のある所)に三千坪の地を選定し、丸窯を築造する事

とし、尾張から寺尾市四郎が来て指導し、尚湖東窯の職工で彼の工場にいた若林喜作（喜之介）井上清二（庄介）丹羽介右衛門、明山初太郎等が手伝つて湖東焼の丸窯に用いた江州犬上郡敏満寺の窯土、即ち耐火粘土を取り寄せて築造した。其窯は四室で一の間は京窯、二の間から四の間までが丸窯である。そして四の間の大きさは巾が二間半、奥行きが一間半位であつた。尚、細工、絵書きの工場、商店住宅などを建築し職工をはじめ使用人は殆んど百名に近い大経営振りであつた。そして多数の洋食器を立派に仕上げて上納した。その製品は日本食器とは形態が違つて異様の形又は大きな器である為渋い物に馴れた京都人士の耳目をそばだてしめ、丸窯を築く頃の冷笑は何時しか消え去つたという。

幹山の隆盛を極めたのは明治六、七年頃から明治二十年頃までで、其名声は内外に顕われ、大日本幹山の名は広く欧米諸国に知られた。故に其工場には時々皇族方の御臨場もあつて其都度、同町の家々には国旗を掲げ、幕を張つて歓迎し、又内外の大官紳士の来場が絶え間なく、門前の狭い道路に馬車、人力車が満ちたさうである。

幹山はまた明治八年に開催された京都博覧会の審査員に挙げられ又出品して進歩賞牌を得た。爾来年々開かれる博覧会毎に審査員となり、同十年、始めて東京に内国博覧会の開催に際して、高さ三尺の大花瓶を出品して鳳紋銀牌を得た。其花瓶には水野香圃が花鳥を描いた。同十二年に仏蘭西の巴里博覧会にも大花瓶を出品銀牌を得た。それは本邦陶磁器出品者中で第一の名譽として授与されたものである。この花瓶も水野香圃が書いた花鳥画であつた。十三年に濠州シドニー府万国博覧会では銀牌、丁抹と和蘭の世界博覧会では何れも金牌を授与された。其の他内外博覧会或は共進会に出品して賞牌を授かつたこと四十余回に及んだという。

茲に忘れてならぬのは有力な後援者と優良な陶工画工のあつたことである。陶工には若林喜作（喜之介）井上清二（庄介）がいて蹴轆轡を用い、清二、丹羽介左エ門（後に、加藤林蔵といつた）は彫物、型物に妙を得、高木徳平（以上四人湖東焼職人）と青木青雲は京都の人で袋物の良工、古河陽三郎と明山初太郎も有力な細工人であつた。絵画には有職模様の九谷庄蔵、花鳥には上原孝染と横田虎次の両人、人物花鳥には水野香圃、染付に岩月捨吉（湖東焼職人）模様物に伊東陶山、其の他中野庄蔵、石田作太郎、山本雪堂、八木利助などの名人がおり、門弟中には尚山添為次郎、辻外吉、加藤弥十郎、藤田定七（以上陶工）、大塚駒吉、中田米次郎（以上画工）などがいた。

幹山の製品には幹山精製、若くは大日本幹山の銘を用い、明治大帝の御用品には特に銘を署する事を許されて高台内の縁に小さく幹山若しくは幹山欽製と書いた。そして銘は京都の堀内某が一手に書き、後には門弟の藤田定七が入れたので初代幹山の銘は書体が一定しているが、二代以下

はいろくである。彼が大日本と冠するに至つたのは明治六、七年頃以後、外国人が大いに注目し輸出が盛んになつてからである。大日本幹山の名は内外に知られ外国よりの注文は単に大日本幹山宛で郵送して来たとの事である。

幹山は人となり温醇、廉潔、沈毅、寡黙で従容事に迫らず、気品の高い人であり、従つて芸術品を味う気風は自から体得して一器一物を製作するにも苟もせず、自身満足する品でなければ、人の求めに應ぜず、金錢は殆んど眼中になかつたという。其作品中に薄手の急須の如き、また二重蓋の茶壺の如き其蓋に独特の技巧が現われている。大形の作品としては高さ三尺五寸の連環付の大花瓶がある。平板物には縦二尺に横一尺五寸の額に花鳥を描き、又紫檀の四曲屏風に磁器の嵌め込みを焼いた。其嵌め込みは巾八寸高さ二尺で表面に山水、裏面に花鳥を描いたものである。又狼を描いた四曲屏風の嵌め込みを焼成した、筆者は何れも上原孝染であつた。

幹山はもとより廉潔に過ぎ工場の経営等には余り関心がなかつた為、工場内部に問題が起り明治十八、九年の頃幹山陶器会社（資本金五万円）を組織して焼成を続けたが、二十年頃の不景氣と貿易不振にたたられ、二十二年遂に会社を解散し工場売却の悲運にあつて、茲にさしも隆盛を極めた工場も消滅してしまつた。幹山は其後自宅で製陶に従事していたが二十三年二月廿八日病歿した。年七十才。墓は西大谷附近の実報寺にあり、初代幹山伝七之墓とある。門弟と有志で建立したものである。（以上湖東焼の研究より抜萃）

若林 壽山（天保三年—明治三十九年（一八三二—一九〇六））

彦根の人、湖東焼に従事し廃窯後、明治の始め京都に來り、幹山工場に蹴轆轡で挽物をしていた。幹山工場閉鎖後、清水の自宅で製作を始めた。

明治三十九年十月廿二日七十四才で死歿。

井上 清二（文政十二年—明治二十三年（一八二九—一八九〇））

湖東焼え尾州から來ていた彫物師で、良工であつた。廃窯後、幹山の京都工場に働き、幹山歿落後自宅で磁器を製作、のち交趾風の楽焼を焼いて清二の刻印を用いていた。明治二十三年一月四日歿、年六十二才。

丹羽介右衛門（加藤林造）

尾州人、型物ひねり物の名手。湖東焼の工人だつたが廃窯後京都幹山工場に働いた。兎作りの名人で兎が粟の穂をくわえた作品は林造の兎といつて有名であつた。歿した年月は不明。

井上 松坪 (松兵衛) [天保元年—明治二十八年(一八三〇—一八九五)]

井上松坪、名を辰次といい、京に来て松兵衛と改めた。尾州瀬戸の産。湖東焼に招かれたが廃窯後京に来て製陶す。陶画を良くし、日根野対山に絵画を習った。

染付けのダミやボカシは松兵衛等が京へ移入した。この技法の伝授のため維新前に美濃呉須を京都に送った事により座敷牢に入れられている。明治十年頃から輸出品を作り松坪、於西京松坪製、大日本松坪製、玉松園松坪などの銘を書いた。

彼が組合長となり天草に渡って原料石の輸送、購入方法を確立した事は有名である。明治二十八年七月六日六十五才で亡くなった。田能村直人、浅井柳塘、中西耕石、鈴木百年、幸野樸嶺等の文人墨客と交流があったという。甥、井上柏山がそのあとを継いだ。

高木 徳平

京都の人、湖東焼に働いた。袋物の名手で徳兵衛といった。廃窯後幹山工場に移り、急須などの名品を作る。明治三十五年七十才で歿す、酒をたしなみ、酒と轆轤に一生を托したといわれる。

奥村 松山 [天保十三年—明治三十八年(一八四二—一九〇五)]

松山、名を安太郎、始め安次郎といった。彦根の人で湖東焼に抱えられていたが、廃窯後京に来て松山焼を始めた。明治十年アレンス商会と結び輸出品を作る。六波羅南通門脇町に工場を持つておった。松山の書判、或は刻印を用い、博覧会等に出品賞を得た事もたびたびであった。仁清乾山写しなども巧みであった。明治三十八年一月十日六十四才で病歿、二代松山、又盛んに焼成をつづけた。

岩月 捨吉 [天保十四年—大正七年(一八四三—一九一八)]

湖東焼で幹山伝七に絵画を学び、廃窯後伝七工場に移り画を書いた。彦根の石屋七兵衛の子である。宮内省の御用品等の染付模様は主にこの捨吉の筆であつたという。幹山会社歿後清水坂で小売店を開き又貿易にも従事したとの事である。大正七年八月廿一日歿七十四才。

林 江山 [弘化三年—大正五年(一八四六—一九一六)]

彦根の人。定治又は定吉といった。湖東焼から京の伝七工場に移り後、五条坂に独立開窯磁器を焼いた。二代幹山を指導したともいう。大正五年七十才で死歿。

明山初太郎 (明治八年(一八七五)歿)

明石屋と称し産寧坂で製陶、明治二年湖東焼再興に招かれたが、明治四年七月廃窯となり京に帰り幹山工場に移った。細工絵画共に優ぐれた技倆を持つて幹山工場の重鎮だったという。明治八年九月七日病歿。

真清水藏六 [文政五年—明治十年(一八二二—一八七七)五十六才歿]

山城国乙訓郡久我村六孫王の庄屋、清水源右衛門の三男で太三郎といった。天保五年(十三才)五条坂の陶工和気亀亭(叔父ともいう)について陶法を学び、天保十四年(二十二才、一説に弘化四年)五条坂に開業し、名を藏六と改めた。

妙法院宮教仁法親王に召されて、陶器を製作御覧に入れたところ、宮はその技能を賞して、真の一字を賜ったので、氏を、真清水と改め、古器、青磁を研究した。元治元年、四宗室の献茶の典に、茶壺、茶盃をつくった。宗室からはその技を賞して、宗缶そうふうの号をおくった。

二代 真清水藏六 [文久元年(一八六一)生]

幼名を寿太郎といい、十二才位より父に家業を習い、十八才より春泉と号し、二十五才より藏六の印を用いた。父の歿後、全国殆んどの窯業地を視察し、明治二十二年には中国に渡り、江西、湖南、福建の各地を経て、山東の諸窯地を巡り、一旦帰国後、二十四年再び訪中、約一年半に亘り、景德、宣興、属山、向蕩、昆山等を巡歴、更に明治四十三年には朝鮮に渡り、京畿、全羅、忠清、慶尚を、つづいて分院、康津、金江等の古窯を探究し京城に入り、陶器を試作、大正元年帰京したが、この巡歴、研究の成果はその作品に表現され、特に緑瓷、白泐瓷等は逸品で、宗・明窯のようであつた。大正六年山科西野山に新しく本窯を築き造詣の深い技能を発揮し、青瓷、染付、祥瑞写し、高麗等を製出した。七十才の頃隠居したがこの間、陶寄(大正七年)及び古陶録(同十四年)等を著す。

ゴットフリート・ワグネル [天保二年—明治二十五年十一月(一八三一—一八九二)]

独乙、ハノーヴェル市の出生、数学、物理学、地理学、地質学、結晶学、機械学を修め、一八五二年二十一才のとき哲学博士となる。長崎在住米人の石鹼工場設立参加の招きに応じ、明治元年(一八六八)来日した。明治三年には佐賀藩に招かれて、有田磁器の製法、石炭窯の築造等を指導した。特に染付用コバルトその他の絵具製法については有田のみならず、全国の陶業に、大きな、影響を与えた。明治六年のオーストリ万国博明治九年の米國、フィラデルフィアの万国博には政府の顧問として活躍、日本工芸品の紹介に努力した。

同十一年には、京都府の舎密局と医学校で、化学工藝を教授し、陶器、玻璃、染色、石鹼製造等を指導し、京都工芸界一新の基となった。当時舎密局で陶磁器の指導を受けたのは、永楽和全、入江道仙等である。同十四年には舎密局廃止のため、東京に戻り、東京職工学校（東京高等工業学校現東京工業大学）に移り、同二十三年一旦帰国、二十五年再び帰任して窯業界のため、技術の進歩、東洋精神と西洋技術の結合により新しい発展を企図したが同年十一月八日死去、六十一才。

大正十三年、岡崎図書館横に記念碑が建立され、ついで昭和十二年東京工業大学校庭内に記念碑が竣工して、其の偉徳を顕彰した。

森本助左衛門

文政十年（一八二七）、相楽郡鹿背山村に、大和五条村の陶工を招き、中国風の古器、祥瑞写し等を製作した。明治初期まで三代助左衛門が、土瓶、土鍋等を作っていたといわれる。

註 別項、弘化四年小川文齋が隠谷に、開窯、日用品を製作し、天保年中、永楽保全が鹿背山窯で古器写しを焼いたといわれている。

松林長兵衛

宇治郷山田に開窯したのが慶応元年（一八六七）で、同郷蘆田の土を用い、初代、藏六に製陶法を学んだ。又明治六年には初代伊東陶山の指導を受けている。この人が宇治、朝日焼の復興者といわれる。

井上 延年（天保十三年—大正三年（一八三二—一九一四）七十三才歿）

瀬戸の生れで、本名を園七といい、明治二十年京都陶器会社に招かれたが、会社の閉鎖後は、清水坂、市橋邸内に居住し、陶器を作り、明治三十三年には、東京高等工業学校窯業科に招かれ陶車を指導したが翌年京都に帰って再び茶器、中国風の模造品等をよくし名があつた。延年の長子が三代松風嘉定である。

伊東 陶山

初代 伊東陶山（弘化三年四月十日—大正九年九月二十四日（一八四六—一九二〇）七十五才歿）

山城国愛宕郡栗田村（現、京都市東山区、栗田口三条附近）

幼名を重次郎、後、幸右衛門と改名、明治二十八年、号、陶山を本名とした。

陶山は家業である「キセル」製造業より、画家を志し、十二才の時小泉東丘に師事して南画を修得していたが、小泉夫人が親交のあつた蓮月尼の「ひねり」の陶器を手伝いするのを見て、自分もこれを知り、小泉東丘夫妻より激賞され、又その勧誘もあつて愈々陶業界に入ることになった、彼の十八才の時である。

陶山は亀屋旭亭（五条坂）について陶磁器製法の基本と一般製陶法、絵付、釉薬の研究をなし、又、高橋道八（三代）、幹山伝七、帶山与兵衛、一文字屋忠兵衛等に師事して各々その特色を研究している。更に京都陶器会社へ宇野五山と共に意匠部の職員として入社し尚研究を重ねた。又、他産地をも深く研究し、滋賀県信楽、兵庫県出石、三重県万古、岐阜県多治見、愛知県瀬戸、石川県小松等に至り、彩釉、意匠、原料等の深い研究を重ねた。

陶山の業績

(1) 朝日焼の復興に力を尽す

明治六年朝日焼の復興に松林長兵衛と共に努力してその復興を実現した。

(2) 栗田焼改善に努力し、栗田焼の名声を高めた。

明治初年以來輸出品の花形として、上絵付の華やかさのみをもつて製出されるのを遺憾として、原石、陶土の研究、釉薬の製作に十数年の努力を重ね明治二十四年釉薬の発明、染付方法の修得に成功し、優秀な栗田焼を製作した。

（晩年の作品には唯に栗田風のものにとどまらず、色釉薬、窯変、染付にも逸品があり、特に白磁地彫り作品を最高とした。）

(3) 陶磁器同業組合の設立を推進

明治二十九年、陶磁器同業組合の設立を推進し取締役となり、次で組合頭取となつて、業界の発展に努力し、特に独自に苦心研究した釉薬、焼成法等については広く組合員に開放して、斯界に貢献した。

(4) 膳所焼の復興に努めた。

山元春拳画伯、膳所（滋賀県）の岩崎健三と共に廃絶した膳所焼の復興を謀り、大正九年三月新窯を築き、膳所焼を復興した。

(5) 古陶器の蒐集

明治初年以來古陶器を蒐集して、その研究成果を新製品に応用した。集めた古陶器は数百にも達し、逸品も多く大正八年、京都及奈良の帝室博物館へ、その内約八十点を寄贈した。

陶山の自営

慶応三年（一八六七）京都東山下河原清井町（祇園石段下）に陳列所を営む。

明治四十二年三条白川筋下ル粟田、土居ノ内町（現代、陶山宅）に工場及陳列所を移転した。

大正九年七月、京都市外山科御陵（現、東山区山科御陵、大谷）に約五百坪の地所を得て新窯を築き、大いに制作しようとしたが、同年九月二十四日卒去。

陶山の榮譽

明治三十二年六月 緑綬褒章を受ける。

明治四十五年三月 久邇宮家（邦彦王）より「陶翁」の号と「金印・銀印」を受ける。

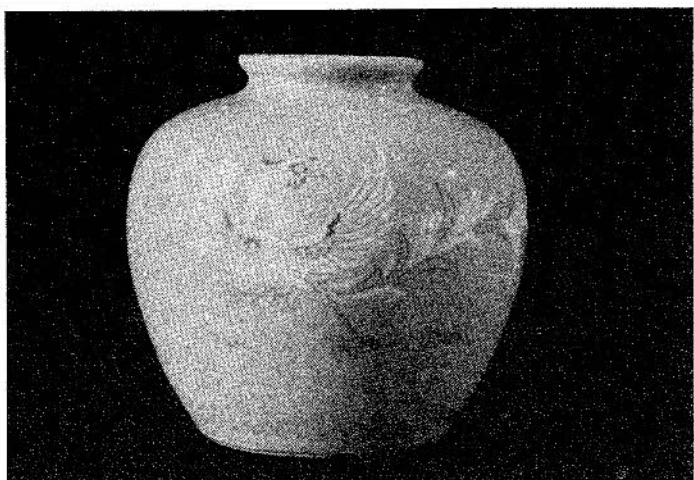
大正六年六月 帝室技芸員に推される。

二代 伊東 陶山（明治四十一年—昭和十二年九月（一八七一—一九三七））

滋賀県膳所藩南本田家の息、元來日本画を習得していたが、伊東家に養子として入った。（この間京都画学校を中退、内海吉堂画伯（南画）について、日本画を習得し、その画才は斯道でも有名であつた。）初代の遺風をつぎ業績益々栄え、当時の帝展、日展の審査員に二回推されている。

諏訪 蘇山（嘉永四年—大正十一年（一八五二—一九二二）七十一才歿）

初代蘇山は、金沢市馬場六番町の出身で、その当初は、武芸、航海術等を学び、明治元年には、壮倫会教授（武芸の免許皆伝者として）、同五年には金沢航海学校に入学するなど、男性的な豪快な人物であつたが、同八年に東京に出て、陶画の業を始め、翌年には、東京品川の大井村で陶器製造業を自営していた。明治十三年から二十九年の間は、石川県に帰り、九谷陶器、銅器会社に勤め又、石川県立工業学校の助教諭等をしていたが、明治三十三年、京都粟田の錦光山工場に囑託として招かれ、同四十一年、五条坂で、製陶業を自営、この間、明治十五年以來研究に没頭した



蘇山作 青磁象簗花全（京都市工芸指導所蔵）

砧青磁を明治四十年に、乳白磁器（建窯といわれる白高麗磁器）を翌四十一年に完成した。即ち、中国青磁が釉薬によらず、胎瓷によるものであることを発見したのである。

大正三年一月には、朝鮮李王家の、高麗古窯跡発見取調囑託及再興設計囑託として、同地に赴き活躍、大正六年六月、帝室技芸員に任ぜられている。

蘇山は上述の通り、京都のみならず、東京、石川（九谷焼で人物、置物等の製作を創始）、朝鮮等に、大きな実績を残している。

大正十一年二月八日卒

松風 嘉定

二代 松風嘉定（嘉饗）が、清水で製陶をはじめたのは嘉永年間であるといわれ、文久元年には磁器日用品の製作を開始した。明治八年には輸出用磁器製造をはじめ、京都の磁器製造の率先者となつた。明治二十一年三月井上延年等と共に京都陶器会社に雇用されている。

大正十三年二月歿八十二才

三代 松風嘉定（明治三年—昭和三年（一八七〇—一九二八））

瀬戸の出身で、父井上延年とともに明治二十二年京都に来て京都陶器会社に入り、翌二十三年、先代嘉定にみこまれて婿となり、三代目嘉定をつぐ。（松風陶器会社の項参照）

初代 三浦竹泉（嘉永六年—大正四年（一八五三—一九一五）六十二才歿）

初代竹泉は、名を政吉、通称を駒次郎、号を、有声居、篩月庵等という。十三才のとき三代、高橋道八に師事し、約十七年間修業、明治十六年五条橋東六丁目で創業した。初代竹泉は、西洋彩色を磁器に応用し、釉薬透明紋を製出、明治三十七年には、青華磁器に玉石珊瑚を挿入し、明治四十一年頃には、新しく発見した黄色原料を釉薬に用い、淡黄陶に彫刻を応用する等、その技術と作品は、内外から喧伝された。又陶説を翻刻出版している。

二代 三浦竹泉（明治十五年—大正九年（一八八二—一九二〇））

父の歿後二代竹泉をついだが僅か五年で病歿、三十九才。三代竹泉（二代、竹泉の男で現、竹軒）がその後をついだ。

四代 三浦竹泉 現竹泉である、二代竹泉の息。

宇野 仁松

元治元年（一八六四）十月京都に生れた。父祖より陶業を受け五条坂に住し、初代清風与平に師事した。専ら美術品製作に従事し、明治十八年頃より海外貿易に着眼、欧米各地に販路を拡めた。

辰砂釉とマット釉は定評があり、又陶器に竹巻を応用することを案出した。

平岡利兵衛（文久元年—昭和十九年（一八六一—一九四四）八十三才歿）

平岡利兵衛は京都商工同業組合の組合長をも勧めたが、明治三十七、八年頃、五二共進会開催の頃より商況活潑となり、東京方面の割烹店が多く有田物等を使用して京焼の進出の少ないのを慨歎し、錦光山、酒見、谷口長等と相計つて、東京芝口鳥森に店舗を借り、京焼展観宣伝を五十日に亘り開催した。陳列品は清風与平、清水六兵衛、高橋道八をはじめ、京焼工場の全般に及び大に効果をあげた。当時まで商品陳列は雛壇式に限られていたが、利兵衛はこれを改善、工夫して陳列式に改ためて、世人の眼を引き、大いに陳列の効果をあげた。この陳列様式は全く利兵衛の考案になるもので当時では革命的のものであった、商号平岡万珠堂は全国に知られている京焼卸販売商である。

宮永 東山（明治元年（一八六八）—石川県大聖寺で生れた。同十八年東京独乙学校卒業、横浜ウインクレル商会入社、仏語学校を経て明治二十八年、東京美術学校講師、農商務省商品陳列館嘱託、この間明治三十二年（一九〇〇）欧州各地を視察、同三十四年錦光山製陶所に入り、京都陶業界に尽した。

京都陶業界での活躍

一、遊陶園 明治三十六年中沢岩太の肝入りで、浅井忠画伯、伊東陶山（初代）清水六兵衛（先代）錦光山宗兵衛等と共に遊陶園を組織し同三十九年には、農商務省商品陳列館で、京漆園（京都漆工芸家の団体）道楽園（染織関係団体）と共に、試作品展示会を開き爾後数年間連続して開催、京都工芸美術界のため貢献した。

二、百貨店に於いて初めて美術工芸品陳列会を催す。明治四十一年、現、三越、当時の三越呉服店会長、日比翁助氏とはかり、東京三越で、京

都工芸美術品—陶器、銅器、漆器等—の陳列会を開催した。京都工芸品を百貨店で陳列、展示会を開催したのはこれが初めてであった。

三、明治四十二年伏見稲荷神社北側、深草開土町で築窯、特に青瓷は出色の作品が多かった。錦光山製陶所廃業の後居を伏見の窯に移し作陶に専念し、現在も二代目、東山が同地で、初代の意志と技術をついで、製作に専念している。

二代 福田松斉（慶応三年—昭和四年（一八六七—一九二九））

初代松斉（力松）の子で、力松は西陣機織商の出身であるが、手先が器用であつたので、五条に出て、土物のひねりと彫刻をしていたが、晩年には西田商店（五条の貿易商）を通じて、米国の博覧会に等身大の草摺曳人形を造つて出品好評を博した。二代松斉は菊次郎といって、父の器用さを受けついで彫刻を主として製陶、仁清、乾山風の土物を造つていた。明治三十年頃より、宇野仁松と共にそば釉薬の研究をしたが、これに成功してそば釉のものを盛んに製作した。この頃は三寧坂の柏山の窯を借り、後、東大路渋谷の酒屋の窯を借り、更に大正二年、日吉町に移り、初めて窯持ちとなり、大正七、八年には横浜の貿易商や地元山伝商店、西川商店を経て盛んに輸出品を製作した。そば釉のものを製作してこれにより成功したので、いつの間にか「そばや」の名がついたそうである。

とに角、京焼業界で、初めてそば釉を完成したことは大きな功績であつた。尚この他に「海鼠釉」のものや、火鉢、羅漢、仁王、弥勒像の大物を造つている。

三代松斉（現代）は其長男である。

沼田 一雅（明治六年—昭和二十九年（一八七三—一九五九））

少年時代、路傍で粘土をひねつて動物の形を作つていたのを通りかかった当時の美術学校長正木直彦の眼にとまり、連れられて上京、彫刻を習つたというエピソードの持主である。

福井県の生れ、明治廿九年東京美術学校助教となり、明治三十六年フランスに留学、三年間パリで絵画、彫刻、陶彫などを勉強、欧州各国を視察した。明治四十年東京美術学校教授となる。

大正十四年再度フランスに渡り、セーブル製陶地で陶彫を研究する。陶彫家の第一人者となつたのもこの研鑽によるものである。この頃よく京都に来て錦光山宗兵衛と交友、陶彫原型を作つて錦光山工場で焼かした。秀品が多い。

京都の国立陶器試験所で平野耕輔所長時代招かれて囑託として肖像等の陶彫を作り、又民間陶芸家に彫刻の技術を教えた。その工芸界への影響は大きいものがあつた。

昭和六年フランス政府からシュバリーエ、ド、ドルドル、ナショナル、レジオンドングール勲章を贈られた。

昭和廿一年より廿五年まで瀬戸市陶磁彫刻研究所々長を務めた。

昭和廿八年恩賜章下賜され同廿九年四月授章祝賀会々場にて突然卒倒、遂に起たなかつた。

尚上野芸術大学構内の二代校長、正木直彦の銅像や、大岡山の東京工業大学構内の初代工業学校長、手島精一の銅像の如きは其代表作である。

昭和二十九年四月病歿。

四代 中村東洸〔明治六年—昭和三十三年（一八七三—一九五八）〕

本名を仁三郎という。石川県の東野演暢の二男で、三代、東郊（初代より東郊と号し、家号を粟生屋という。代々加賀藩の御庭焼を造つていた）の養子となり、養父と共に京都に出て絵を上田丹厓に、陶を父、後には三浦竹泉（初代）について習得し、大正七年、阿弥陀ヶ峰の山麓に開窯「豊谷窯」と称した。後、五条坂五丁目に移転、第二次大戦の際疎開のため東大路五条上ルに移つた。

青華、金欄手、赤絵を得意とし、金欄手には特に逸品がある。明治四十年には、二条基弘より「東洸」の名を、（従来は東郊）大正四年には土方久元伯より「加陽庵」の庵号と雅印を受け中国の窯業地も視察している。又官展及び各種展覧会で十五回受賞した。昭和三十三年八十六才歿。

現、東洸は五代目である。

大丸 北峰（大丸谷）〔明治十二年—昭和三十五年（一八七九—一九六〇）〕

石川県加賀市大聖寺町に生れ、明治二十七年より九谷陶器会社で陶画を修めた。同三十二年京都にきて北山石泉に師事し、更に陶画の特技を伝授され。同三十九年には、選ばれて中国に赴き、湖南省長沙府醴陵県磁業学堂の陶画部の教師として指導に当たるとともに、中国の製陶法、原料等について研究を重ねた。

同四十三年、帰国して独立営業を始めた。

染付、赤絵等が得技で、特に南画風の煎茶器に逸品があり、昭和三年、今上陛下の即位の大典には、皿を製作して御買上を賜つてゐる。又、京

都府、市主催の展覧会、博覧会等に出品して、金賞をはじめ、多数受賞している。昭和十四年には、陶磁器価格調査委員、同十七年には茶道具格付委員会委員を夫々囑託され、昭和十八年日本陶磁器技術保存資格認定された、戦後年とともに技、益々ふるい、その枯淡な筆致は愛好者の絶賛を博した。八十一才で歿し、二代目北峰がその後をついでいる。

中沢 岩太（工学博士）窯業教育者 工芸指導者

京都高等工芸学校初代校長。京都帝国大学工学部教授を経て高等工芸の創立に当り其校長となる。工芸方面の理解深く自らも絵画、彫刻を試みて趣味の深いことは衆知の人、ことに陶器に関心深く、京都の工芸陶家は皆其の指導を受けた、京都陶界の忘れることのできない恩人である。

小島幸三郎 窯業教育者

京都高等工芸学校窯業科の科長として長年にわたり子弟の教育にあたり、京都陶業界の受けた恩恵は忘れることができない。

菊地左馬太郎 画家、工芸図案家

京都高等工芸学校講師、京都市陶磁器試験場技師等を歴任、独米漫遊、絵画は素空の雅号を有して知られている、氏のよき図案は明治大正の京都陶界をリードしていた。

河原 徳立（瓢他図）

明治時代輸出陶器をつくつた、後東京に進出、南禅寺境内金地院に墓がある。

北村弥一郎（工学博士）松風工業株式会社取締役 松風陶歯製造株式会社取締役（昭和元年六十才にて死亡）

国立工業試験所第三部長（窯業）として活躍後、京都の松風系に入り、松風工業で磚子、松風陶歯では陶歯に就いて、又日本硬質陶器では金沢釜山の工場に製品改良の技術者として重きをなした。又、我國の陶磁器関係に関する論文を提出して博士になつた最初の人である。（金沢市出身）

横荻 一光（大正十三年歿、七十五才）

一光は金沢の人幼名徳松といい、明治の初年京都に来て陶を学んだ。明治十二年門人中川浅次郎（京都の人）を伴つて金沢に帰り鷺谷に製陶したが、明治十五、六年頃越中瀬戸と称する西礪波郡西野尻村の市右衛門窯に至つて陶を教え、数年にして金沢に帰り開窯したが明治二十九年大洪

水に会い、窯大破して修理不能となり、京都にきて陶業に従事す。陶技円熟、晩年は緻密な彫刻を施した独特の陶器を作つて名をなした。五条坂安祥院附近に住んだ。年七十五才で大正十三年歿。三男一造また一光と号し清水四丁目に製陶するという。

平野 耕輔〔明治四年—昭和二十二年（一八七一—一九四七）〕

愛知県西春日井郡東杉村右平治の四男として生る。明治二十一年十月東京職工学校陶器玻璃工科に入学ワグネル博士の教えを受けて同二十四卒業、東京工業学校教授、満鉄工業試験所長に就任、満洲の窯業開発に尽した。昭和三年満鉄を引揚げて後同五年植田場長のあとを受けて、京都の商工省陶磁器試験所々長として、京焼と深い関係を持つ事となり、京焼の発展に尽した。昭和十二年末まで在任、退官後小田原の自宅に隠居、昭和二十二年四月歿した。

池田 泰山 初代〔明治二十四年—昭和二十五年三月（一八九一—一九五〇）〕

泰山モザイク、タイル、の創始は大正六年代で、硝子モザイクの美しい窓が西欧の建築に應用されて教会建築には欠く事の出来ない存在となつたが、陶器片でモザイク、タイルを作り室内装飾から船室装飾、浴室装飾等に使われ我国建築界に泰山タイルの名をほしまゝにしたのは池田泰山の創意と努力の結晶である。泰山製陶所と称し昭和十四年株式組織とした。

泰山は市立陶磁器試験場附属伝習所に学び、独立して梅原政次郎等と協同で加茂川べり九条辺に開宣したが其後独立して建築業界と提携、盛に美術工芸タイルを製出した。泰山は其後病に侵されながらも部下を指揮してその名声を落さず、京焼業界の一異彩として輝しい存在であつたが、昭和に入つても、病癒えず、将来を期待され乍ら遂にたゞず倒れたのは残念だつた。泰山は愛知県知多郡半の生れである。

むすび

以上において、近代京都陶磁器業の成立及びその発展過程、将来の希望等を略述したが、斯業はその創始以来、西陣織、京染、丹後ちりめん、京漆器、京仏具等京都の伝統産業と盛衰を共にし、京都の産業にふさわしい格調の高さを維持し、芳香を内外に誇つてきたのである。

しかし、近時、機械、金属、化学工業等の比重増大につれ、陶磁器業の京都産業全体に占める比重は次第に低下し、輸出においても昔日の偲をとどめ得ない。

又、京都業界の全国陶磁器業界にしめる地位を生産額（電磁器化学陶器を除く）よりみると、昭和元年五、九％、二〇年には四、三％、三〇年には二、九％と低下している。近年東濃の大衆向品の大量進出により、又有田方面製品の料理飲食店向品の上昇により、内需中心の京都としては、はげしい角遂場裡に立たざるをえないこととなつた。

以上の如く生産額の面よりすれば、停滞傾向といわねばならぬが、京都陶磁器の特色は伝統産業一般に通じて見られる如く、量よりむしろ質であり、この質的面に着目すれば、なお全国の指導的地位を保っており、特に高級品、工芸品としては全国同業の最高峰にあるといえる。これ等の過去を洞察してたゆまざる努力と精進をつづければ京焼の前途は決して悲観すべきものでないと思う。

本書を書き綴つたのも、京焼の過去の業績を偲び、将来発展の示針を探り、新たな京焼工芸の発展を期待したいからであつた。かかる大きな望をもつて筆をとつたのであるが、希望のみ大きく力これに伴わず、甚だ意に満たざる結果となつた。

しかし筆者としてはできる限りの努力をつくしたことを付記したい、

さて、まがりなりにも印刷、校正を終つて、愈々製本にかゝれる事となつた。難産であつたが漸く陽の目を見る喜びである。ここに至つた事は京都府、京都市の両長官が、京焼発展の記録に興味を持たれ、特別の厚意を物心両面に与えられ、又関係係官をして終始多大の援助を寄せる事を許された事など感謝にあまるものがあり、この事実は編さんにたづさはつた者のみならず京焼関係者全部の光榮として深く銘記すべきである。

また本書の印刷製本等については中西印刷株式会社、大英堂印刷社、双方の幹部が伝統京焼産業の為にとの真心から、利害を超越して協力を惜

しまずとの申出があり、其結果が見事実を結んでこの本となつた。感謝の至りである。

顧りみれば三年有余の長期間各方面の御援助と深い寛容と忍耐によつてこの書は成つた感激と感謝に筆を擱く事とする。

昭和三十七年三月

藤岡幸二

付表一 統計表